

令和2年度滋賀県埋蔵文化財発掘調査成果報告集

土の中から歴史が見える2020 ―最新の発掘成果から―
(第115回滋賀県埋蔵文化財センター研究会)

1. 滋賀里遺跡[大津市]

大津市教育委員会

2. 椿谷遺跡[大津市]

(公財) 滋賀県文化財保護協会

3. 大野遺跡・普門南遺跡[大津市]

(公財) 滋賀県文化財保護協会

4. 惣山・京ヶ山遺跡[大津市]

(公財) 滋賀県文化財保護協会

5. 霊仙寺・糺遺跡[栗東市]

(公財) 栗東市スポーツ協会

6. 下鈎東遺跡[栗東市]

(公財) 栗東市スポーツ協会

7. 小柿遺跡[栗東市]

(公財) 栗東市スポーツ協会

8. 高野遺跡[栗東市]

(公財) 滋賀県文化財保護協会

9. 塚本遺跡[彦根市]

彦根市

10. 佐和山城跡[彦根市]

(公財) 滋賀県文化財保護協会

11. 名勝旧秀隣寺庭園[高島市]

高島市教育委員会

令和3年(2021)3月

1. 滋賀里遺跡 ～北藪ノ下地区の発掘調査～

遺跡名：滋賀里（しがさと）遺跡

所在地：大津市滋賀里四丁目

時代：弥生時代中期・後期、古墳時代前期・後期

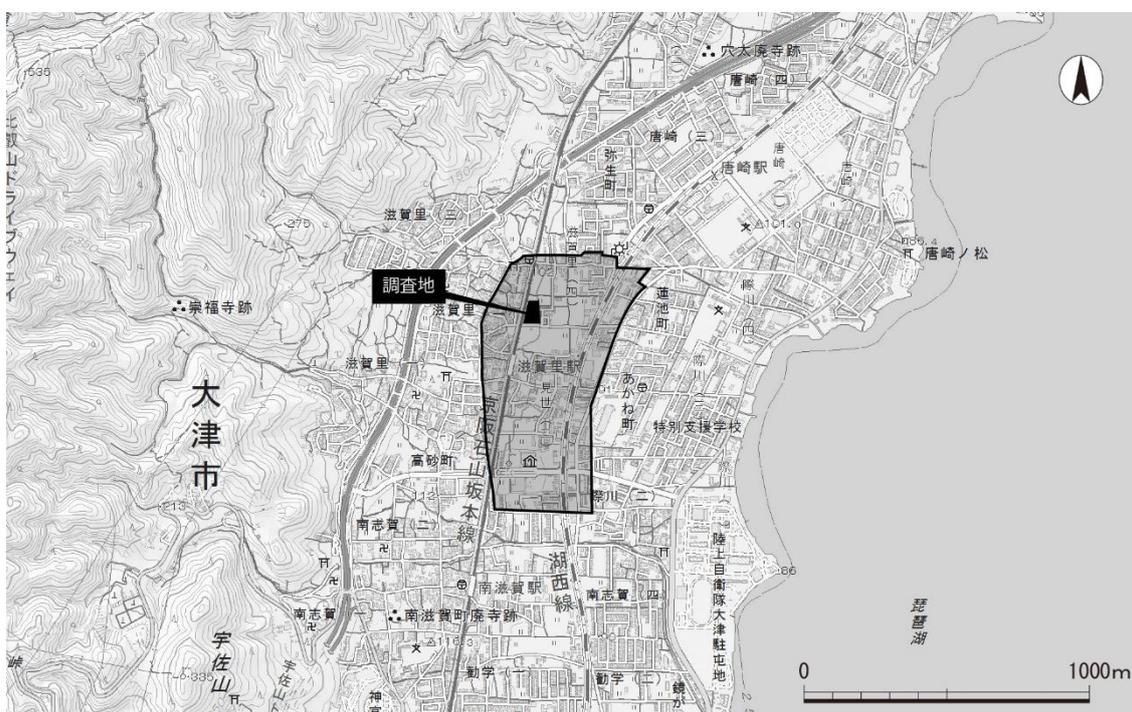
調査面積：約750㎡

調査期間：令和2年4月14日～8月7日

調査原因：宅地造成

調査機関：大津市教育委員会

報告者名：柳原 麻子



遺跡の位置 (1/25,000)

調査の概要

大津市滋賀里遺跡は比叡山東麓から琵琶湖へ東流する複数の小河川によって形成された複合扇状地上に立地します。森林資源や水資源を手に入れやすい場所として、古くは縄文時代から生活の痕跡が認められています。滋賀里遺跡で出土する縄文時代晩期の土器は「滋賀里式」土器の標識土器としても有名です。

また、琵琶湖湖西の地域は6・7世紀に渡来系の集団が移動してきたとされていますが、滋賀里遺跡においても関連の遺構である「大壁建物」が12棟確認されています。

本調査地は滋賀里遺跡の範囲の北側にあたりますが、この周辺にも過去に3棟の大壁建物が検出されており、本調査地も古墳時代後期に営まれたとされる渡来系の集落の範囲に含まれるものと考えられていました。

しかし、今回の発掘調査では弥生時代中期の土坑(土坑墓?)や弥生時代中期・

後期の竪穴遺構、磨製石器製作関連遺構など、弥生時代の生活の痕跡が主体的に認められました。本調査の成果は天津市における弥生時代の生活の様相を把握するだけでなく、古墳時代後期の集落の範囲について問い直す重要な調査成果となりました。

遺構

発掘調査は3つの調査区に分かれています。特に重要な遺構が多かったのは南側の最も広い「第1調査区」です。今回は第1調査区の成果を中心に説明します。

(1) 弥生時代

① 竪穴遺構【写真1・2】

第1調査区の南側を中心として6基を検出しました。全形がわかるものは一辺約5.0mの方形を呈することが確認できましたが、やや不定形な遺構もあります。一部の遺構については柱穴も確認できたため竪穴建物であったと思われます。弥生時代中期・後期の土器類が出土しました。

② 土坑（土坑墓？）【写真3～5】

第1調査区の広い範囲で4基を検出しました。全形が把握できた1基は長さ約4.0m、幅約1.0mの長楕円形を呈し、深さは検出面より約0.7mを測ります。それぞれの土坑の中からは弥生時代中期後半の土器の破片が多数出土しました。磨製石鏃が出土した土坑もありました。壺が主体を占めることから土坑墓のような祭祀にかかわる遺構であった可能性があります。

③ 磨製石器製作関連遺構【写真7・8】

第1調査区の遺構面上で検出した石器の剥片や砥石のまとまりです。まとまりの中には弥生時代中期後半の土器片も含まれていたことから、弥生時代中期後半か、それ以降のものと思われます。剥片は約20点が出土しました。まとまりの中には砥石と思われる石製品5点や、磨製石剣の破片2点も含まれていました。磨製石剣の失敗品が捨てられたか、あるいは磨製石剣を別の製品に作り替えた際の破片であると考えられます。

(2) 古墳時代

① 埋甕？【写真6】

古墳時代前期の埋甕と思われます。口には石で蓋がしてあります。中にはわずかながら炭化した稲も認められました。

② 溝

第1調査区を南北に走る溝です。幅約1.0m、長さ20.0m以上を測り、深さは検出面から約0.5mを測ります。古墳時代後期の土器類が出土しました。

遺物

弥生時代の石器が特徴的です。磨製石鏃、石錐、砥石、剥片が出土しました。弥生時代中期・後期のものと思われます。

磨製石鏃の1点は弥生時代中期の土坑（土坑墓？）から出土しています。武器

や狩猟具というよりも、祭祀に用いられた可能性があります。

また、剥片は調査区内のほぼ全域から出土していますが、特に剥片が集中していたのが「磨製石器製作関連遺構」です。全て粘板岩と呼ばれる柔らかい石材です。敲いて剥離させたものや、磨いたものがあります。10 cmを超えるような大型の剥片もありました。一方で砥石は砂岩などの別の石材を利用していたようです。砥石の形状は細長いものや握りこぶし大のもの、板状のものなど様々な種類があります。加工工程によって使い分けていたのでしょうか。

まとめ

今回の発掘調査成果の重要な点は以下の通りです。

① 弥生時代の磨製石器の利用

今回検出した「磨製石器製作関連遺構」は磨製石器の生産過程を想定するうえでも重要な成果となるだけでなく、これまでほとんど理解されていなかった大津市内における石器の生産・消費の実態を知るうえでも稀少な事例となりました。

弥生時代中期・後期は集落間の緊張関係が顕著になる時期とされており、滋賀県内でも環濠集落(守山市、下之郷遺跡・伊勢遺跡など)や高地性集落(大津市、高峯遺跡・部屋ヶ谷遺跡など)などの遺跡にこれらの関係性が見られています。今回出土した武器や祭祀具とされる磨製石器もまた当時の情勢を把握する重要な情報となるでしょう。

② 弥生時代中期後半の土坑（土坑墓？）

長楕円形の土坑に壺を主体とする土器類が納められていましたが、同様の遺構は滋賀里遺跡の南側に位置する南滋賀遺跡にも認められています。

南滋賀遺跡では扇状地の比較的高い地点に弥生時代中期の方形周溝墓が多数検出されていますが、方形周溝墓の近くには滋賀里遺跡の事例の様に弥生時代中期の壺などの土器類が納められた土坑が見つかっています。

滋賀里遺跡では今回方形周溝墓は確認できませんでしたが、近くに方形周溝墓があり、それに伴うように土坑墓や祭祀遺構を設けたのかもしれない。

③ 古墳時代後期の集落の範囲

滋賀里遺跡の範囲の北部は古墳時代後期の大壁建物や掘立柱建物が検出されていることから渡来系集団による集落があったと想定されている地点です。

しかし、今回の発掘調査で確認された古墳時代後期の遺構は南北に長く走る溝のみで、明確な活動の痕跡が認められませんでした。古墳時代後期の集落は本調査区より東におさまるものと考えられます。



写真1 調査区南側完掘状況



写真2 調査区北側検出状況



写真3 弥生時代中期後半土坑①



写真4 弥生時代中期後半土坑②



写真5 弥生時代中期後半土坑③



写真6 古墳時代前期埋甕？



写真7 磨製石器製作関連遺構



写真8 磨製石器製作関連遺構出土剥片・砥石

2. 椿谷遺跡 ～採石場に残された石積と砂防堰堤～

遺跡名：椿谷（つばきだに）遺跡

所在地：大津市枝三丁目

時代：大正～昭和前期頃

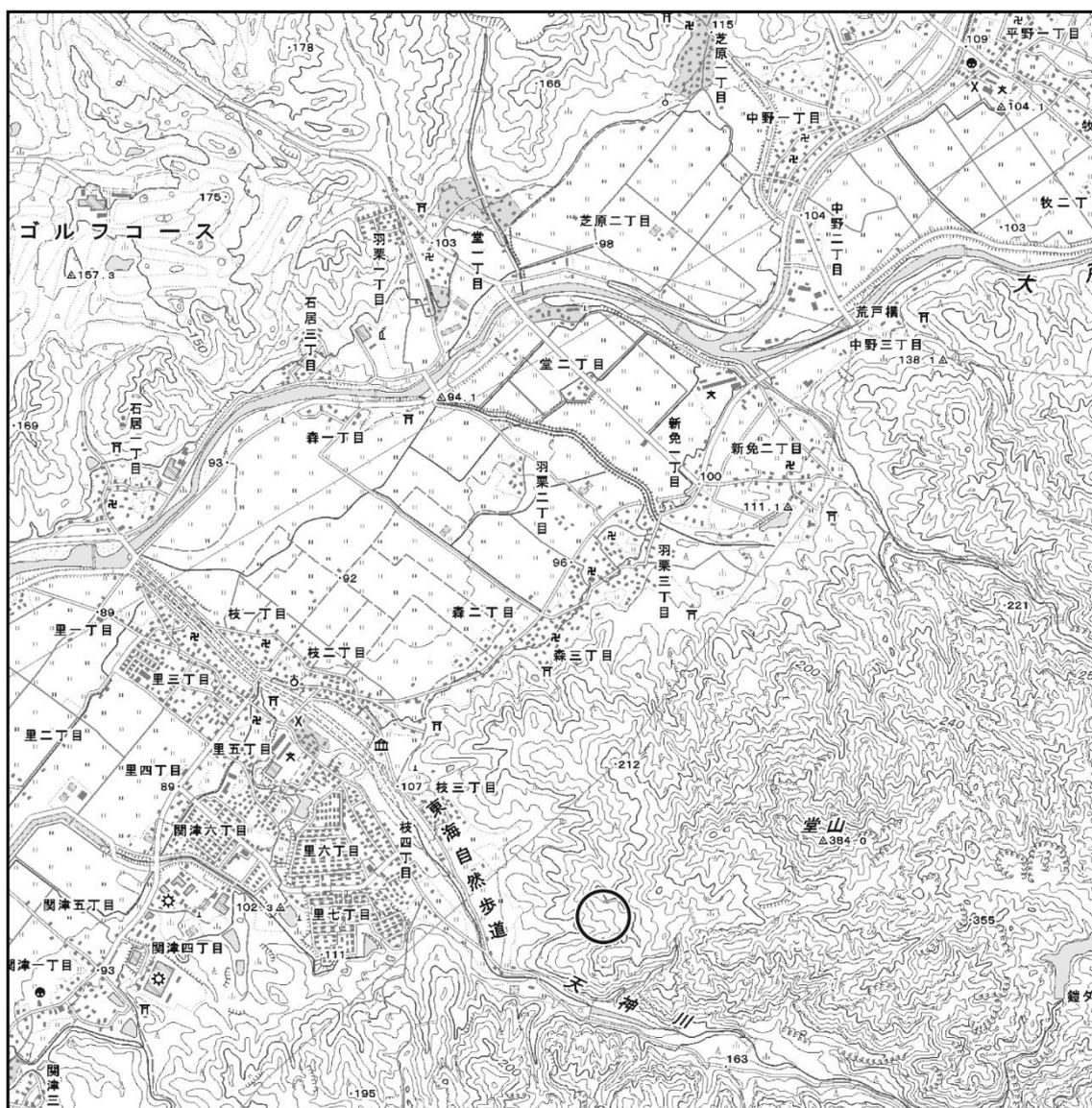
調査面積：1,800㎡

調査期間：令和2年6月～11月

調査原因：近畿自動車道名古屋神戸線（大津～城陽）建設事業

調査機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

報告者名：神保 忠宏



遺跡の位置 (1/25,000)

調査の概要

椿谷遺跡は、大正時代に操業した記録のある石切場の跡で、田上山の花崗岩露出地点に位置します。

公益財団滋賀県文化財保護協会は、滋賀県（教育委員会）からの依頼をうけ、近畿自動車道名古屋神戸線（新名神高速道路）に伴う椿谷遺跡の発掘調査を平成28年度から実施してきました。平成28年度の遺跡範囲調査では、13ヶ所の石切場と7ヶ所の石積、1ヶ所の砂防堰堤などの存在を確認し、平成29年の発掘調査では、道路工事範囲に収まる6ヶ所の石切場と1ヶ所の石積の調査を行い、石切場の構造を確認しました。今回の調査では、2ヶ所の石積と1ヶ所の砂防堰堤、1ヶ所の井戸の調査を行いました。

遺構

石切場の法面をささえる石積（石積1・石積2）と土砂の流出を防止する砂防堰堤、そして井戸の調査を行いました。

石積1 石切場の南側に位置し、長さ約36m、高さ約3mを測ります。井戸がある平坦面を支えるために築かれたと考えられ、石積上端は、斜面に投棄された屑石が落下しないように壘状の石積があります。石積の南西部には、積み方の異なる個所があったため慎重に解体したところ、内部から別の石積を発見しました。竣工後にこの石積を埋め殺して今残る石積を増築したと考えられます。

石積2 石切場の南東側に位置します。平坦面を支えるため2段に積まれており、中央部は崩壊していますが、復元すると長さ約15m、高さ約5mを測ります。

砂防堰堤 石積1の基礎を守るために付随する施設で、長さ約8m、高さ約2mを測ります。石積は下流側のみに施され、下端は洗掘を防止するために直方体の石を跳ね出していました。一部は破損していますが、石は丁寧に加工され、水通し部分や石積1の接続部は特に丁寧な加工が施されています。

井戸 石切場の平坦面中央に位置し、直径約1.5m、深さ約2mを測ります。南西側には石段があることから、水汲みに使用されたと考えられます。

遺物

井戸の近くからガラス瓶と鉄製クサビ、湯飲み茶碗の破片が出土しました。ガラス瓶には「日本麦酒鑛泉」と「三ツ矢印」が陽刻されていることから、大正時代後期から昭和初年にかけて製造されたサイダー瓶であることがわかりました。鉄製クサビは、直径5cmサイズと直径10cmサイズを確認しました。いずれも石切場が操業していた時に使用したものと考えられます。

まとめ

椿谷遺跡は、大正時代に操業したこと以外は、石切り場の記録がほとんどわかっていません。しかし今回の調査で、埋め殺しにされた古い石積の存在や、石積1の崩壊を防ぐために丁寧に築かれた砂防堰堤の構造などが判明しました。近代の土木施設を調査した県内の事例は少ないことから、貴重な発見といえます。

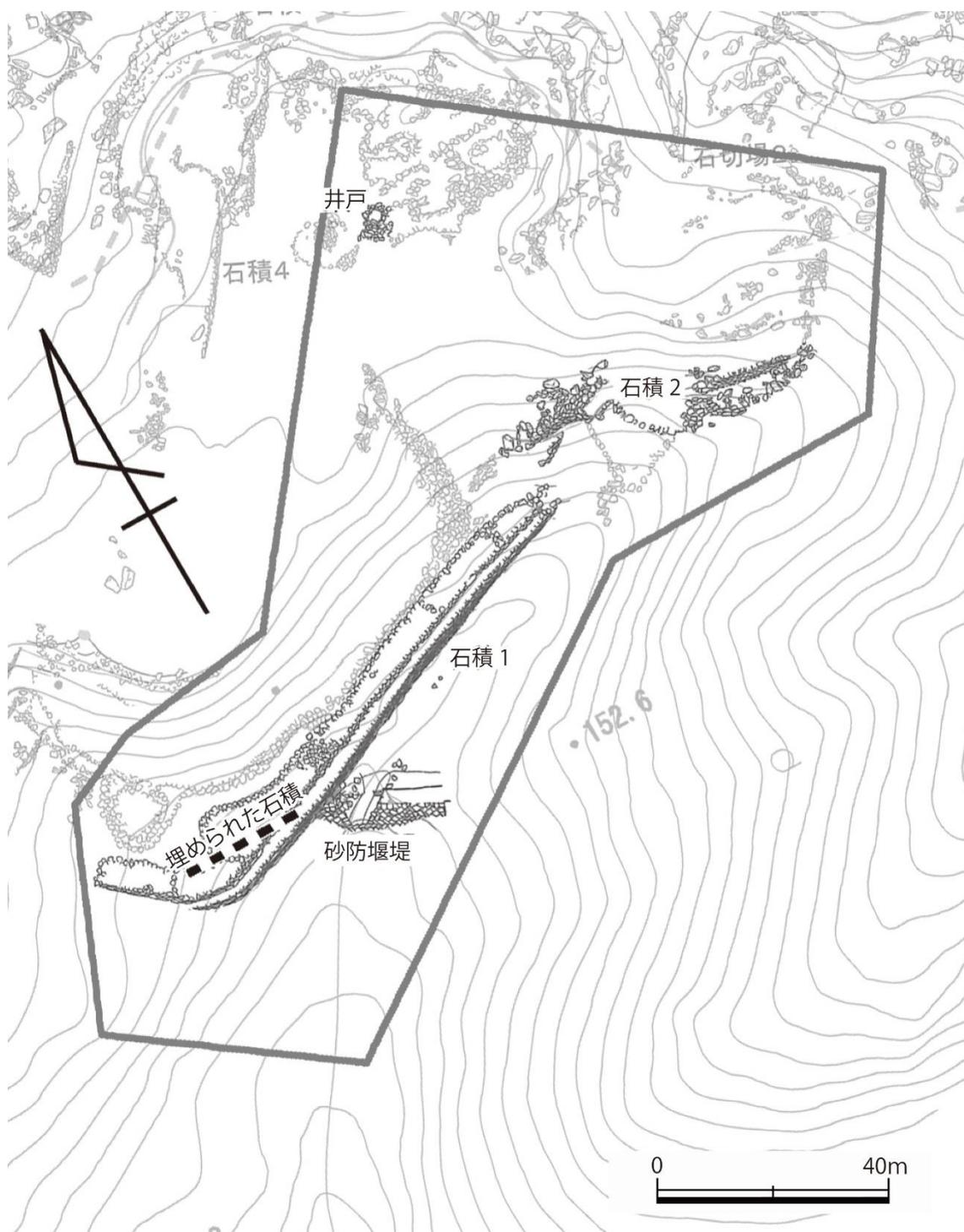


図1 椿谷遺跡 令和2年度調査区



写真1 石積1 (南から)



写真2 石積1 積み方の違い (南東から)



写真3 裏込めから現れた古い石積（南東から）



写真4 石積2（南東から）



写真5 砂防堰堤（南から）



写真6 井戸（南西から）

3. 大野遺跡・普門南遺跡 ～真野川沿いに住んだ人々～

遺跡名：大野（おおの）遺跡、普門南（ふもんみなみ）遺跡

所在地：大津市真野大野地先、普門地先

時代：古墳時代、平安時代

調査面積：2,185.32㎡

調査期間：令和2年6月～令和3年3月

調査原因：一般国道477号線4車線化工事

調査機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

報告者名：木下 義信



遺跡の位置 (1/25,000)

調査の概要

大野遺跡、普門南遺跡は、真野川左岸の微高地上に所在し、昭和に実施された調査で、古墳時代の竪穴建物跡や平安時代の建物跡などが発見されています。周囲を見渡すと、遺跡の北部に近接する曼陀羅山には、古墳時代前期の前方後円墳である和邇大塚山古墳（全長 72m）をはじめ、後期には数多くの群集墳が築か

れるようになります。さらにその東麓には須恵器の窯跡である知原古窯跡や、唐臼山古窯跡などが所在し、須恵器生産の地としても知られてきました。つまり、曼陀羅山を中心とした真野川左岸の丘陵部一帯は、古墳時代から墓域や生産拠点として土地利用がなされてきたのです。

今回の調査地は、その丘陵部の南部、真野川左岸の微高地上に位置します。調査では、おもに古墳時代と平安時代の遺構や遺物を発見しました。中心となるのは古墳時代のもので、その時期の竪穴建物跡や河川跡などを検出しました。特に河川跡からは、多くの須恵器・土師器のほか、下駄などの木製品が出土しています。さらに出土した須恵器の中には、焼成不良のものが含まれており、生産地により近い集落だったことが窺えます。つまり、当遺跡は河川沿いに展開した古墳時代の集落であり、曼陀羅山に築かれた多くの古墳群や、須恵器生産とも関わりのある人々が生活を営んでいた可能性が考えられます。

遺構

今年度の調査では、おもに古墳時代と平安時代の遺構を発見しました。古墳時代の遺構は、竪穴建物跡が計4棟に加えて、河川跡の一部を検出しています。この河川跡は、真野川へと注ぐ支流と考えられ、その川沿いに人々が竪穴建物を築いて生活を営んでいたのでしょう。河川跡からは、古墳時代の遺物のみが出土していることから、この時期には埋没したと考えられます。また平安時代の遺構は、掘立柱建物跡2棟、土器埋納遺構などを発見しました。土器埋納遺構は、直径50cmほどの小さな穴の中に、土師器の皿が重ねて埋納されたもので、地鎮の祀りを行ったと考えられます。

遺物

出土した遺物の多くは河川跡からのもので、おもに古墳時代のものと考えられます。出土した須恵器の中には、焼けひずんだもの、重ね焼きの際に別個体の一部が融着したものなどがみられ、近隣に所在する須恵器の窯から、この地に製品が運ばれて、使用・廃棄されたものと考えられます。また、河川からは木製品が少量ながら出土しており、発見された下駄は全長約17cm程度の小型のもので、底部の歯は削り出して作られており、農耕用の田下駄ではなく履物として使用されたものと考えられます。古墳時代の下駄の発見例は、県内でもそれほど多くはなく、当地に住んだ人々のことを考えるうえで貴重な成果となっています。



写真1 大野遺跡 遠景



写真2 大野遺跡 調査地全景



写真3 普門南遺跡から曼陀羅山をのぞむ



写真4 普門南遺跡 竪穴建物跡



写真5 普門南遺跡 古墳時代の河川跡



写真6 河川跡から出土した須恵器の甕



写真7 焼け歪み、別個体が融着した須恵器



写真8 河川跡から出土した下駄





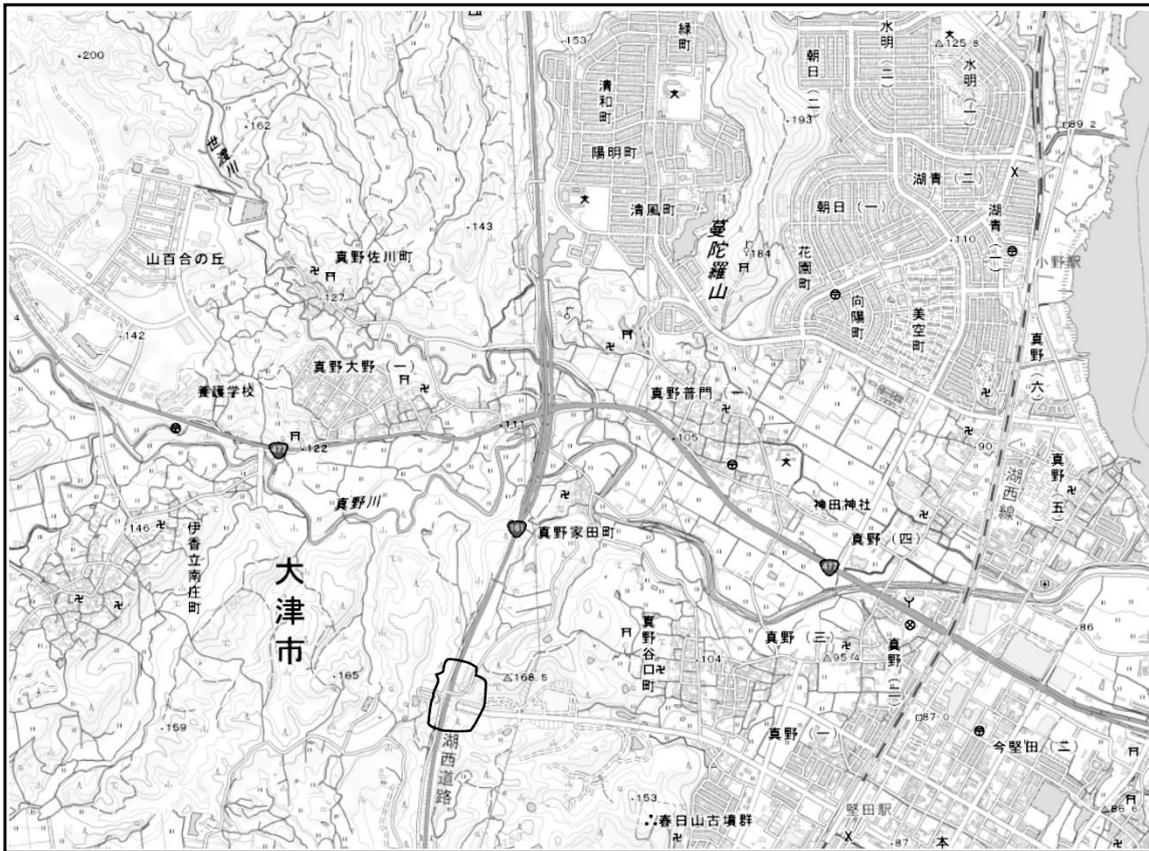
写真9 普門南遺跡 平安時代の掘立柱建物跡



写真10 普門南遺跡 平安時代の土器埋納遺構

4. 惣山・京ヶ山遺跡 ～堅田丘陵上の弥生時代遺跡～

遺跡名：惣山・京ヶ山（そうやま・きょうがやま）遺跡
所在地：大津市真野家田町
時代：弥生時代～古墳時代
調査面積：2,945㎡
調査期間：令和元年9月～令和2年3月
令和2年4月～令和2年6月
調査原因：一般国道161号湖西道路工事
調査機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会
報告者名：神保 忠宏



遺跡の位置 (1/25,000)

調査の概要

惣山・京ヶ山遺跡は、琵琶湖の西部にある堅田丘陵の惣山および京ヶ山の山頂部に位置する遺跡です。昭和56年（1981）に調査が行われて弥生時代の竪穴建物や土坑・溝・小穴などを確認しました。このときは一部の遺構を掘削しただけで埋め戻されています。今回、湖西道路拡幅工事に先立つ発掘調査が行われ、弥生時代後期の遺構や遺物とともに、古墳時代後期の横穴式石室や遺物が確認されました。

遺構

調査区は3ヶ所ですが、遺構を確認したのは山の頂にあたるT1とT2でした。

T1 弥生時代後期の竪穴建物・溝・土坑と、古墳時代後期の横穴式石室を確認しました。

竪穴建物S1は、東西5.0m、南北4.8m、残存する深さ0.3m～0.6mを測る隅丸方形の建物跡で、内部から弥生時代後期と考えられる土器の小片が出土しています。

竪穴建物S2は、直径6.9m、残存する深さ0.2m～0.3mを測る円形の建物跡で、遺構内部には周壁に側溝が巡り、柱穴と考えられる小穴を多数確認しています。また、中央部には焼土坑があり、炉のような火を使用した場所と考えられます。床面に近い場所から石器作成時に生成した剥片を多数確認し、弥生時代後期の土器や磨製石器・打製石器が出土しています。

竪穴建物S3は、東西7.1m～7.6m、南北7.5m前後、残存する深さ0.2m～0.3mを測る多角形の建物で、周壁に側溝が巡り、柱穴と考えられる小穴を多数確認しています。また、床面に近い場所から石器作成時の剥片を多数確認し、弥生時代後期の土器や磨製石器・砥石などが出土しました。

竪穴建物S176は、東西5.0m～5.5m、南北4.6m、残存する深さ0.2m～0.3mを測る隅丸方形の建物跡で、周壁の一部に側溝が残っていました。床面や周壁から炭化した焼土などが見つかったことから、火災で焼失したと考えられます。また内部から弥生時代後期の土器が出土しています。

溝S67は、竪穴建物S2の北東から北に向かって延びる溝跡で、幅0.6m～1.0m、残存する長さ約6.0mを測ります。S2の周壁と繋がっていることから、排水溝のような施設だったと考えられています。溝内より弥生時代後期の土器が出土しました。

横穴式石室S10は、T1の南東部にあります。墳丘は確認できませんでしたが横穴式石室は残存していました。玄室は幅0.8m、長さ1.7mの右片袖石室で、羨道は幅1.0m、長さは2.2mほど残っていました。石積は右袖部から羨道部にかけて3段残っていましたが、大半は1～2段が残存しています。石室の上層から8世紀の須恵器と12～13世紀の土師器が出土し、石敷の床面から7世紀初頭の須恵器・土師器が出土しました。このことから、7世紀頃に古墳が築かれ、12～13世紀頃には石室に進入できるような環境だったことが推定されます。

T2 弥生時代後期の竪穴建物・溝・土坑を確認しました。

竪穴建物S1は、東西7.6m、南北7.2m、残存する深さ0.1m～0.3mを測る円形の建物跡です。西半分は浸食によって周溝の一部が残るのみでしたが、東半分は周壁や周溝、柱穴と考えられる小穴が比較的良好に残っていました。周壁部を中心に炭化した木片や焼土、被熱した弥生土器が出土したことから、火災で焼失したと考えられます。

竪穴建物S2は、一部が攪乱で失われていますが、東西5.0m、南北5.8m、深さ0.15mを測る隅丸方形の建物跡です。西側の周壁から排水溝と考えられる溝を確認しています。床面直上部や周壁から炭化した木片や焼土、弥生時代後期の土器が見つかったことから、火災で焼失したと考えられます。

土坑S36は、S1の北東に位置する遺構で、長辺1.2m、短辺0.5m～0.8m、

深さ 0.3m を測ります。内部から弥生時代後期の土器が集積して出土しました。

土坑 S78 は、S1 の北西に位置する遺構で、長辺 0.8m、短辺 0.5m、深さ 0.3m を測ります。内部から炭化した土および焼土がみつかったことから、火を使用した施設だったと考えられます。

遺物

土器類は、弥生時代後期の壺、甕、高坏などが出土しました。多くは焼失した竪穴建物（T1-S176 T2-S1 T2-S2）や土坑（T2-S36）、溝（T1-S67）から出土しています。また、横穴式石室（T1-S10）から 7 世紀頃の須恵器や土師器、12～13 世紀頃の土師器が出土しています。また、竪穴住居（T1-S2 T1-S3）から打製石器や磨製石器の鏃や石器製作時に生じた剥片、石器を磨くために用いられた砥石などがみつかりました。また炭化した竪穴建物（T2-S1・T2-S2）の部材も出土しています。

まとめにかえて

今回の調査で、堅田丘陵にある小丘の頂から弥生時代の生活痕跡を確認しました。いわゆる「高地性集落」と考えられる遺構ですが、連立する頂部それぞれに存在する遺構群の関連性など、課題となる点もあります。

また横穴式石室をもつ古墳の存在は、近接する春日山古墳群との関連性を考える今後の課題も残されています。

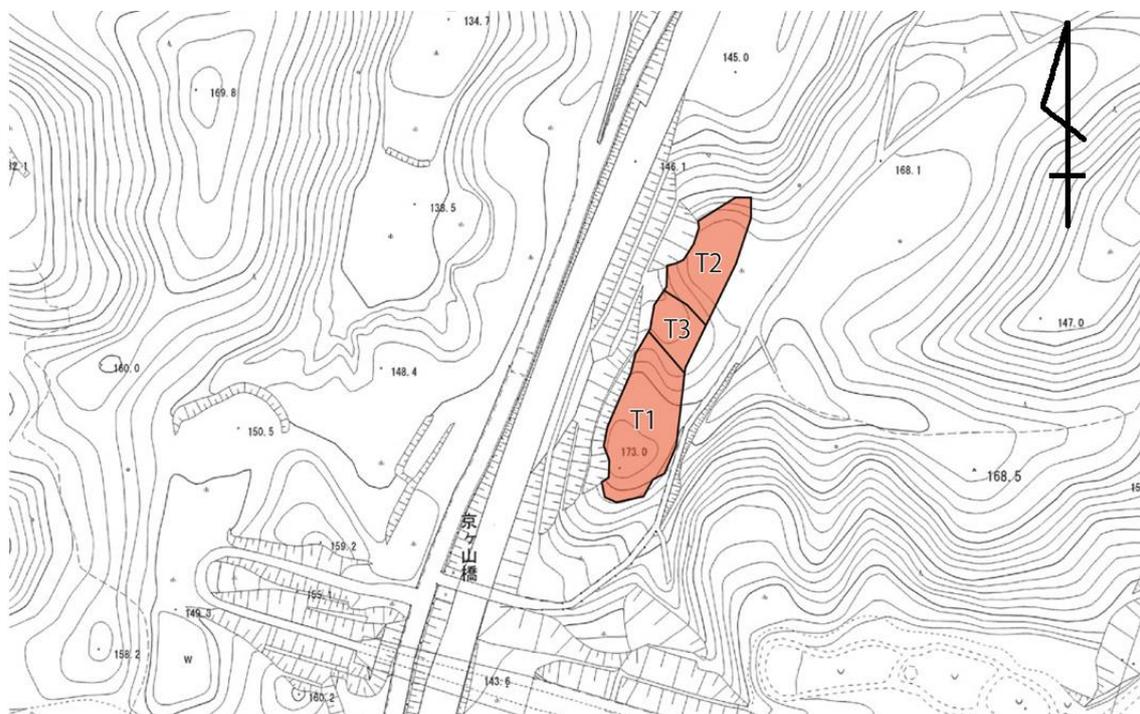


図 1 調査区の範囲

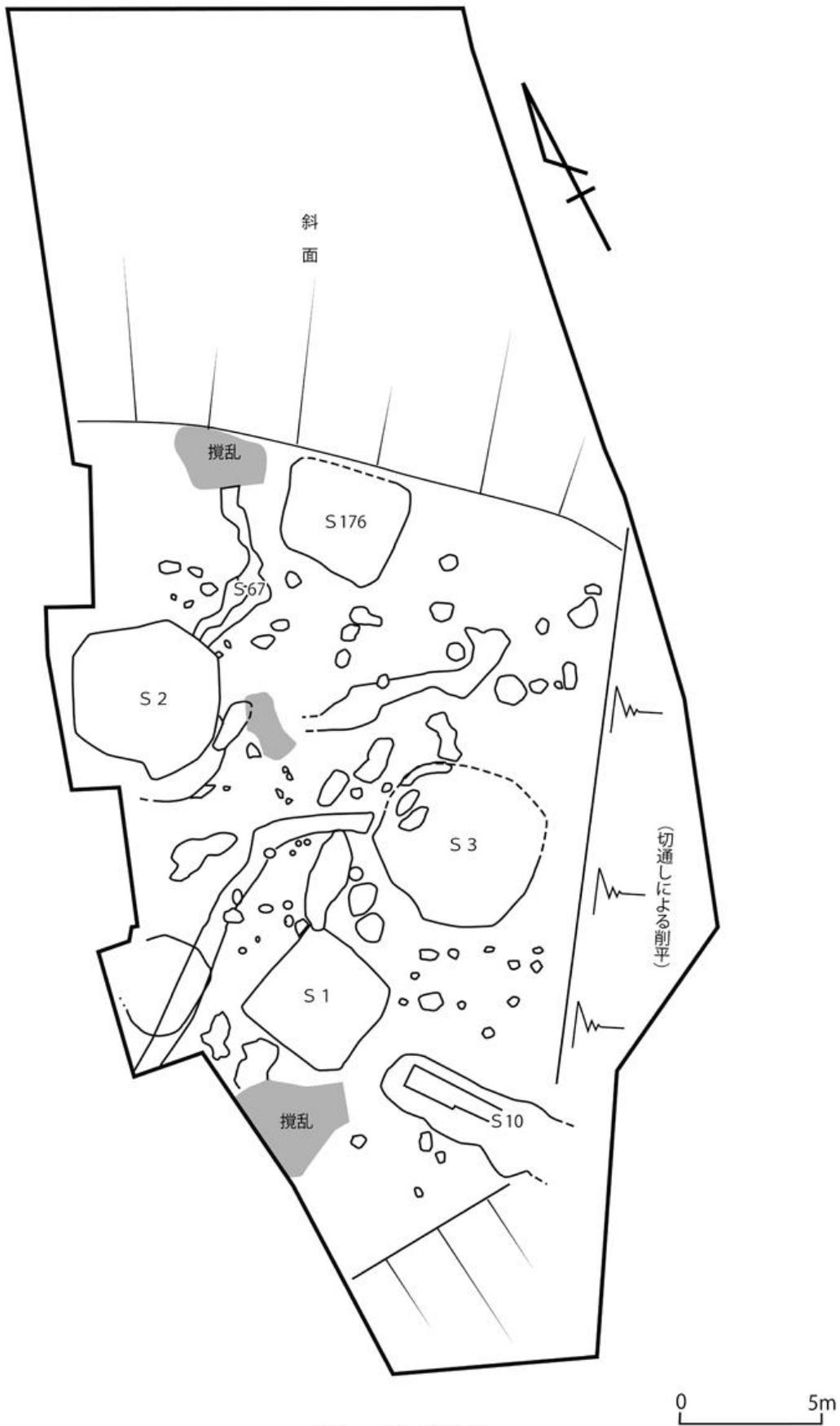


図2 T1遺構図



0 5m

图3 T2遺構図



写真1 T1 全景（北東から）



写真2 T1 竪穴建物 S1（北東から）



写真3 T1 竪穴建物 S2 (南東から)



写真4 T1 竪穴建物 S3 (北東から)



写真5 T1 竪穴建物 S176 (南東から)



写真6 T1 溝 S67 (北から)



写真7 T1 横穴式石室 S10 (北西から)



写真8 T2 全景 (北東から)



写真 9 T2 竪穴建物 S1 (南から)



写真 10 T2 竪穴建物 S2 (東から)



写真 11 T2 土坑 S36 (北から)



写真 12 T2 土坑 S78 (東から)

5. 霊仙寺・縷遺跡 ～奈良時代の墨書土器が出土～

遺跡名：霊仙寺・縷（りょうせんじ・へそ）遺跡

所在地：栗東市北中小路181番11 他

時代：弥生時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代

調査面積：9,111m²

調査期間：令和2年6月15日～令和3年6月18日（予定）

調査原因：宅地造成

調査機関：（公財）栗東市スポーツ協会

報告者名：佐伯 英樹



遺跡の位置（1/25,000）

調査の概要

今回の調査地は、霊仙寺遺跡の北東端部、縷遺跡の西端部に位置し、両遺跡にまたがった位置に所在します。栗東市域の中では琵琶湖に近い沖積平野に位置し、主として野洲川が形成した扇状地性低地に立地し、標高は約93mです。

霊仙寺遺跡では、小平井地区で多量の瓦や無文銀銭などが出土し、正南北の地割が検出されるなど、白鳳寺院が確認され、小平井廃寺と仮称されています。

縷遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓群が検出され、前方後方形周溝墓も確認されています。また中世では、環濠集落の大規模な濠が確認されています。

今回の調査地は霊仙寺遺跡の北東部と縫遺跡の西端部に位置し、調査により弥生時代後期から鎌倉時代までの様々な遺構遺物が出土しました。

遺構・遺物

弥生時代では後期の竪穴建物1棟（一辺約8m）の他、複数の円形土坑、井戸1基を検出しました。続く古墳時代、飛鳥時代では、出土遺物は見られませんが、遺構は今のところ検出されていません。

奈良時代では、2棟の掘立柱建物と井戸1基を検出しました。井戸SE877は、トレンチ6の東端で検出しました。直径2.6m、深さ1.55m、井戸枠などは残存しませんが、墨書土器が3点出土しました。いずれも須恵器杯身の底部に墨書が残り、2点は「廣津」（ヒロキツ）と判読でき、1点の文字は不明です。

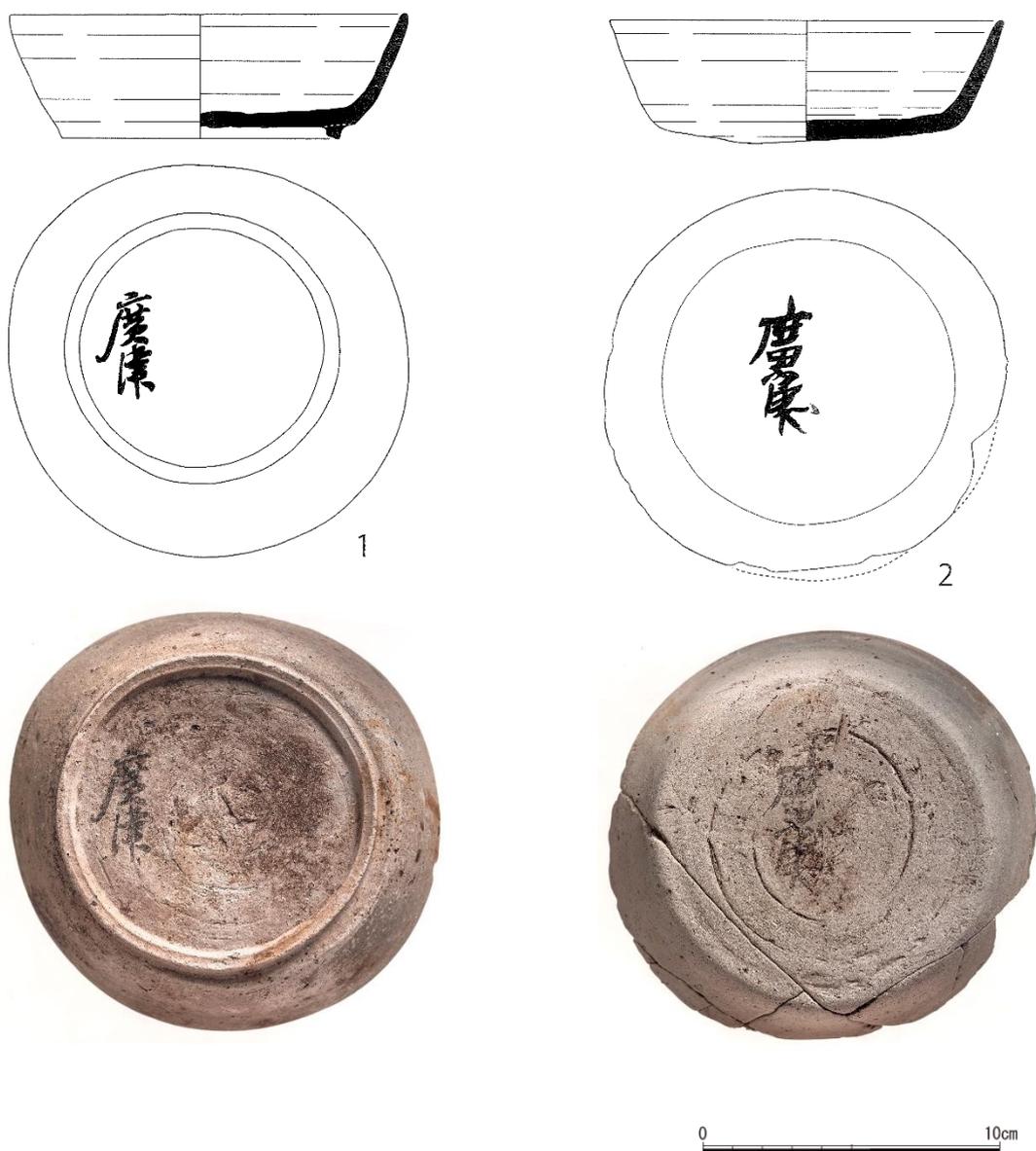
平安時代では、9～10世紀代と考えられる掘立柱建物6棟と井戸1基を検出。掘立柱建物のうち2棟は高床倉庫で、うち1棟は3間×3間、床面積25㎡の比較的大規模な造りです。井戸は一辺1.6m、深さ1.6mで、井戸底には方形に組まれた井戸枠とその内部に曲物（まげもの）が残存し。曲物内部から黒色土器碗のほか、水霊祭祀の祭具である齋串（いぐし）が4点出土しました。

平安時代末から鎌倉時代初めの12世紀後半から13世紀前半では、掘立柱建物14棟以上、井戸10基、土坑、区画溝を検出。掘立柱建物は1間×3間、2間×3間、2間×4間、3間×4間など小・中規模のものですが、5間×5間で、一辺10.8m、床面積120㎡の比較的大規模な建物があります。区画溝は3条確認。規模は幅2.2m～2.8m、深さ0.6m。最長50mにわたり検出しました。また、11世紀以前の水田を検出し、畦畔周辺の15m×8m（120㎡）の範囲から足跡状の窪みを多数（約400ヶ所）検出しました。

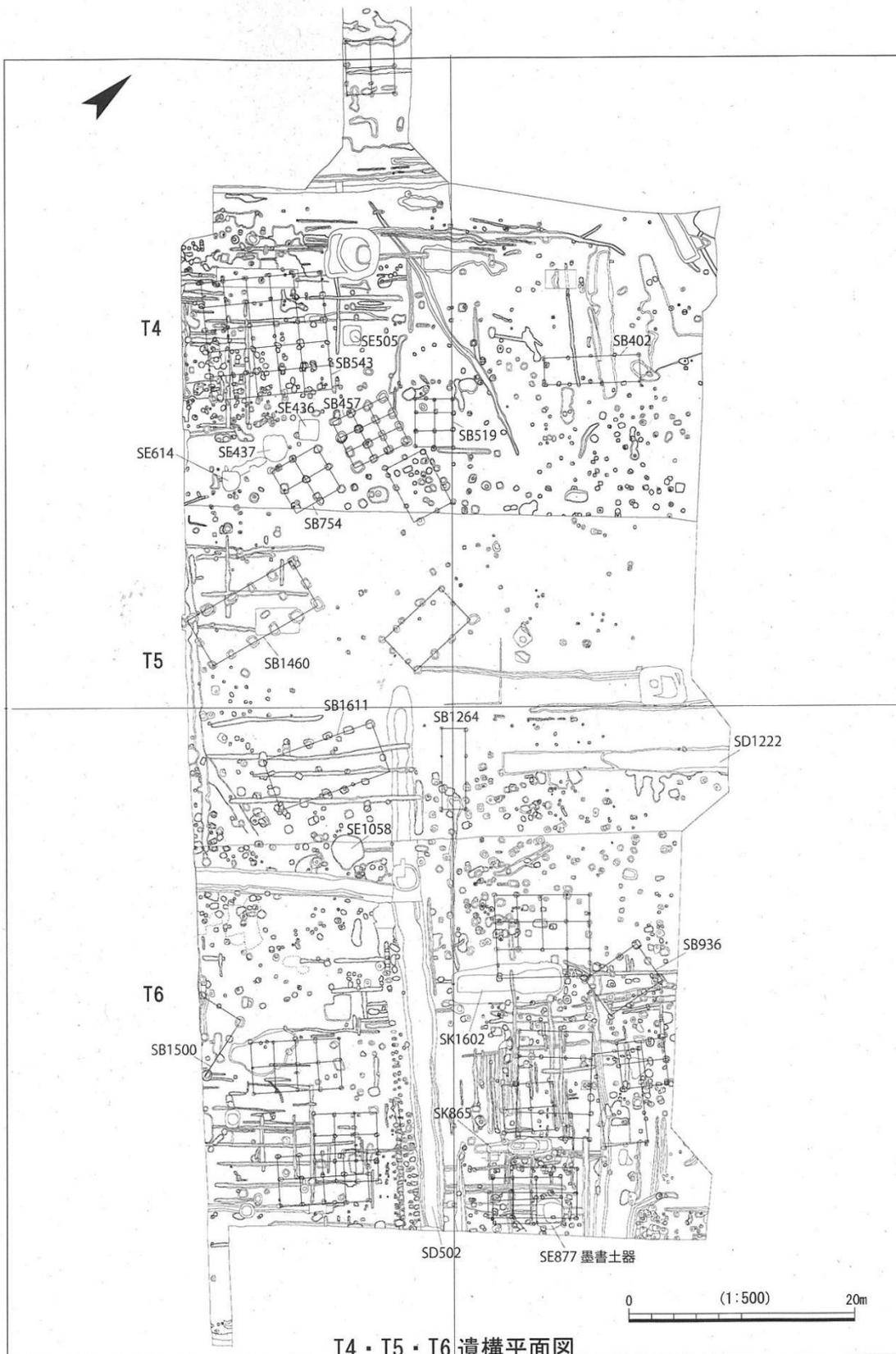
まとめ

- ① 弥生時代後期では竪穴建物が1棟の検出であるが、土坑や井戸からは比較的少量の弥生土器が出土していて、周辺に集落の広がりが想定されます。なお、竪穴建物は、壁溝（へきこう）・屋内土坑（どころ）・支柱穴のみの検出であり、弥生時代の生活面が数十センチにわたり削平されていることが分かります。
- ② 奈良時代では、正南北方位を採る2棟の掘立柱建物と井戸1基を検出しました。井戸SE877からは墨書土器「廣津」（ヒロキツ）2点が出土。「廣津」氏は物部系の渡来氏族であり、近江国栗太郡物部（もののべ）郷にあたる当地に居住した氏族を考えるうえで貴重な資料になりました。
- ③ 平安時代の掘立柱建物6棟と井戸1基を検出。井戸には木枠と曲物が残り、曲物内からは水霊祭祀などに用いられる祭具である齋串4点が出土しました。

- ④ 平安時代末から鎌倉時代始めには、区画溝に囲まれた集落が発達し、掘立柱建物を建替えながら生活を営んでいた様子が見えてきます。14世紀には北中小路の現集落や、東山道沿いへ集落は移り、この付近が水田化していったことが、耕作痕の存在からうかがえます。
- ⑤ 区画溝をもつ集落の北側では、11世紀以前に水田が営まれていましたが12世紀後半には居住地となっています。
- 以上、広範囲の調査により、この地域の歴史的様相の一部が明らかになった意義は大きいといえます。



SE877 出土墨書土器



T4・T5・T6 遺構平面図



写真1 竪穴建物（弥生時代）



写真2 墨書土器が出土した井戸（奈良時代）



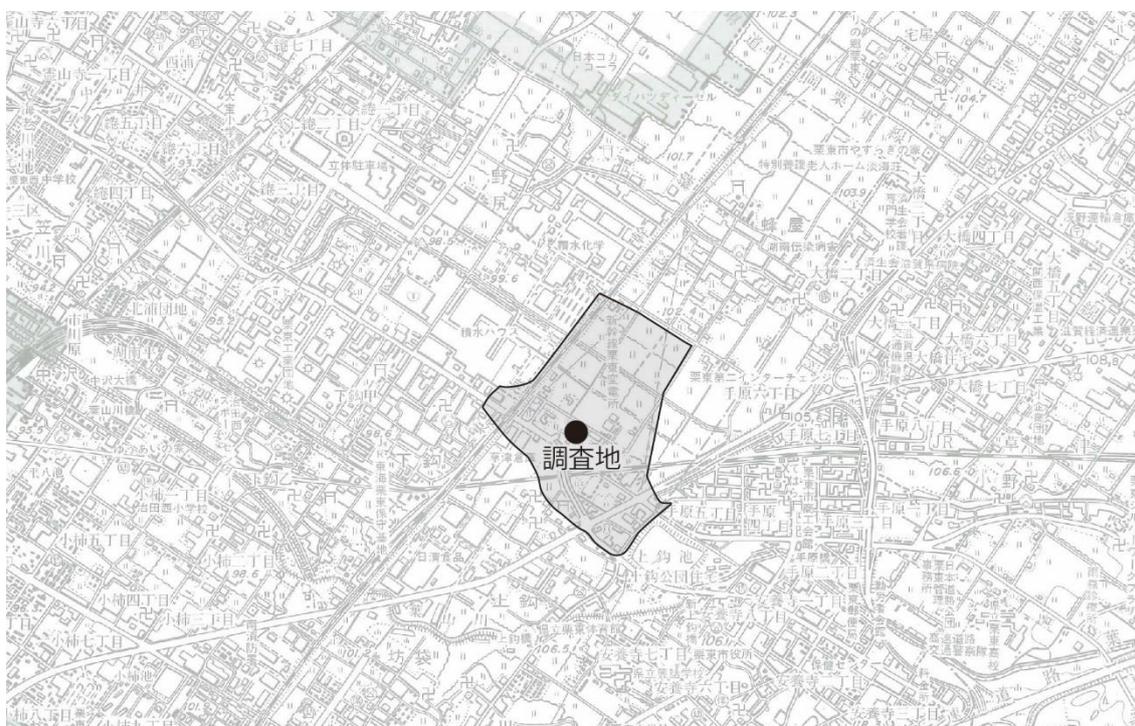
写真3 平安時代の高床倉庫



写真4 平安時代の井戸

6. 下鉤東遺跡 ～大型竪穴建物の発見～

遺跡名：下鉤東（しもまがりひがし）遺跡
所在地：栗東市上鉤
時代：弥生時代後期、鎌倉時代
調査面積：1,211m²
調査期間：令和2年7月27日～令和2年11月11日
調査原因：営業用倉庫建設工事
調査機関：（公財）栗東市スポーツ協会
報告者名：遠藤 あゆむ



遺跡の位置（1/25,000）

調査の概要

下鉤東遺跡は、弥生時代から近世に至るまでの遺跡で、下鉤遺跡、辻遺跡、伊勢遺跡など、弥生時代の大規模な集落跡が見つかった遺跡と近接した遺跡です。これまでも、栗東市教育委員会が何度も調査を行っており、調査地周辺でも、2005年に栗東市内初の五角形竪穴建物が確認されています。

今回の調査は、栗東市教育委員会からの委託により、令和2年度に営業用倉庫建設工事に伴う下鉤東遺跡の発掘調査を行いました。

調査では弥生時代後期から古墳時代前期まで、連続して建てられたとみられる竪穴建物が6棟確認されました。最も大型のもので、直径9mの円形の竪穴建物が確認されています。

遺構

遺構は、竪穴建物を中心とする弥生時代後期から古墳時代前期にかけてと、掘立柱建物を中心とする鎌倉時代の、主に2時期の遺構が確認されました。

竪穴建物

竪穴建物は調査区内で確実なもので5棟、後世の削平によって大部分が失われたと思われる残骸を含めて、計6棟見つかりました。そのうち3棟は一辺6mを超えるやや大型の建物となっています。建物は一部重なっていて、出土した土器から、弥生時代後期から古墳時代前期の建物とみられます。建物が重なっていることから、古い建物が埋まってから、さらにその上から新しい建物を立て直しており、長い時間人が居住していたと考えられます。

大型竪穴建物

今回見つかった竪穴建物で最大のもは直径約9mを測ります。遺構内に残存していた壁溝の跡から、最初直径約6mで作った竪穴建物があり、その建物を壊した後に再度同じ場所に直径約9mの竪穴建物を建てていると考えられます。中央部を含め、炉跡らしき焼土はみられず、壁溝内や土坑からは土器資料に恵まれなかったため、明確な建て替えの時期は不明ですが、何らかの理由で古い竪穴建物を拡張して大型化させたと考えられます。

掘立柱建物

掘立柱建物は調査区内で5棟見つっています。一間はおおよそ2mで統一されています。掘立柱建物1は東西3間×南北3間（約6m×約6.1m）の総柱建物とみられ、今回の調査区内で見つかった掘立柱建物としては最大のもです。しかし、建物1の周辺は、調査区内で、最も削平を受けている場所であるため、元々あった遺構が削り取られていることも考えられます。そのため、現在想定できる建物の規模よりもさらに大きくなる可能性があります。掘立柱建物の時期は、出土遺物から、いずれも鎌倉時代（13世紀頃）とみられます。

遺物

遺物は、竪穴建物及び掘立柱建物の柱穴を中心に大量の土器が出土しました。

弥生土器

出土した弥生土器の多くは受口状口縁甕、高坏で、僅かに長頸壺、鉢、後述する注口土器などがありました。弥生土器のほとんどは竪穴建物の埋土、およびその周辺から出土しました。受口状口縁甕を観察すると、口縁部の形状と文様を施している個体がほぼ無いことから、庄内式土器と並行期、3世紀頃のものと考えられます。

注口土器

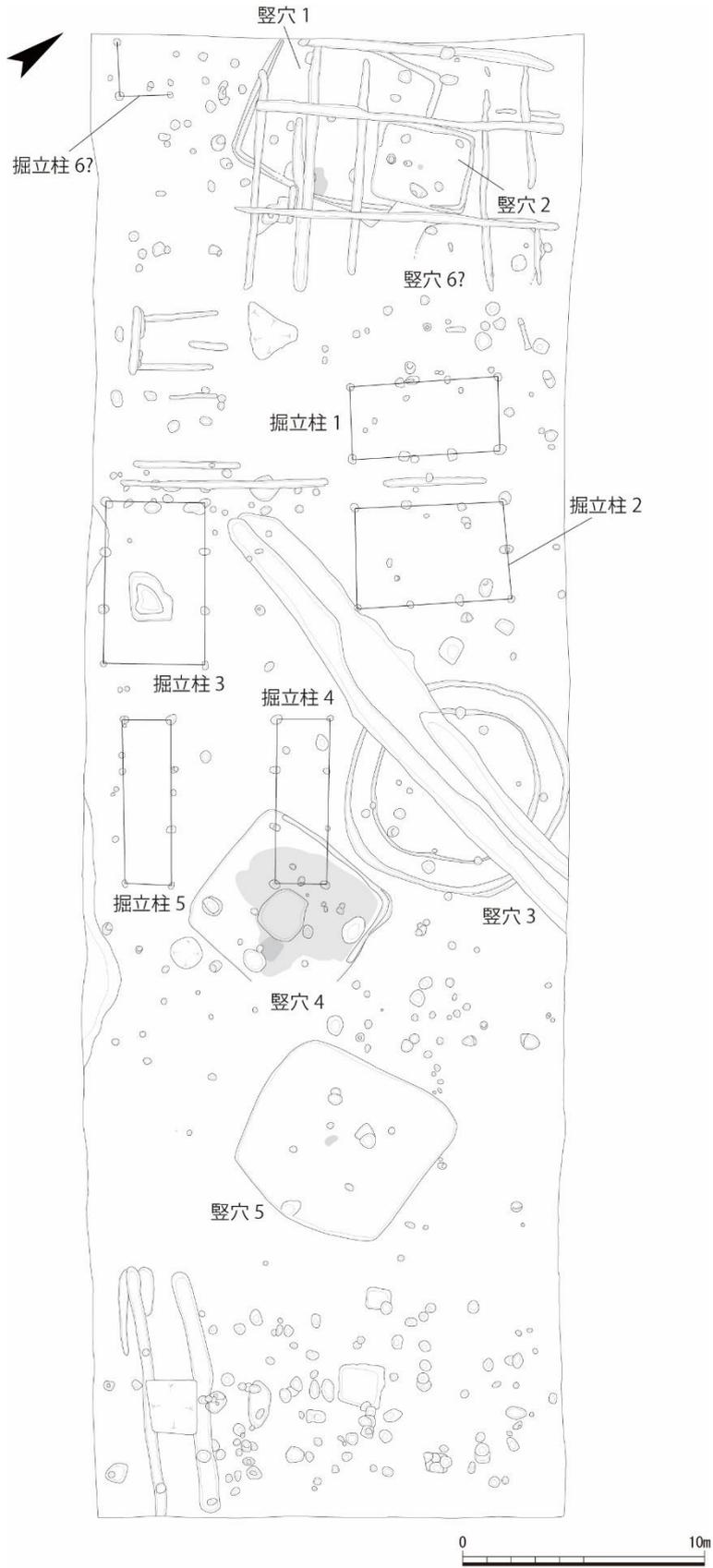
注口土器と思われる土器は、竪穴建物5から出土しました。一緒に出土した土器から、弥生時代後期のものと考えられます。通常、注口土器は縄文時代に多く

作られ、弥生時代ではあまり出土事例はありません。弥生時代の注口土器の例としては、山陰地方で生産されていることが知られていますが、今回下鈎東遺跡で出土したものは、弥生時代の中で後期以降に属するもので、山陰地方や北陸で流行する弥生時代中期の注口土器とは器形も年代も少し違う、特異なものとなっています。

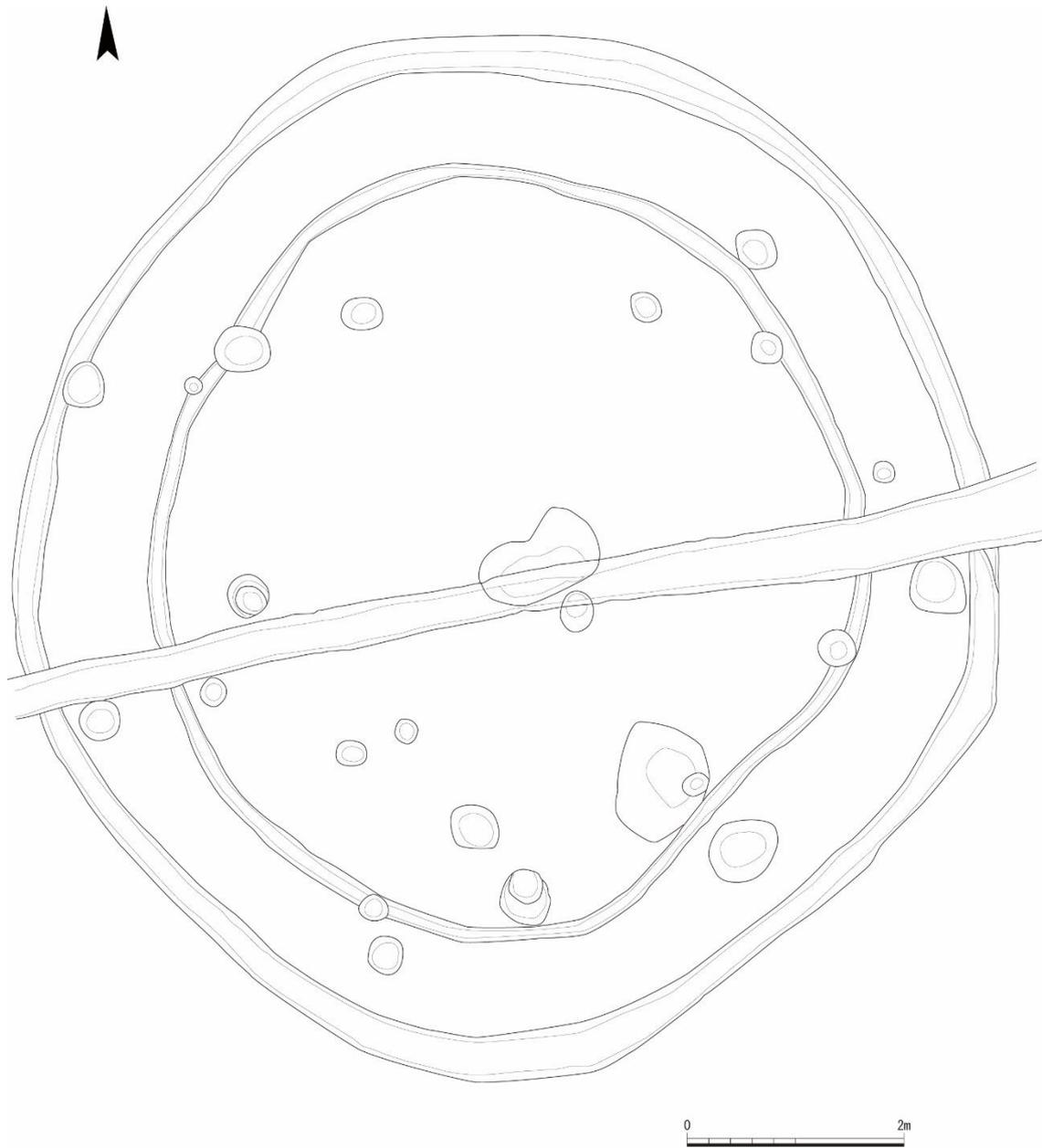
土師皿

土師器の皿は、主に掘立柱建物の掘方から出土しました。柱の底などに据え付けられた形ではなく、埋土からの出土であったことから、ゴミとして遺棄されたものであると考えられます。皿は薄橙色で、口径は8 cm程度、器高1.0 cmから1.5 cmと非常に小ぶりで、鎌倉時代（13世紀前半頃）の土器であると思われます。

遺構図等



下鈎東遺跡遺構平面図 (1/250)



豎穴建物 3 (1/50)



竪穴建物 3・4 完掘状況（東から）



竪穴建物 5 埋土中出土注口土器



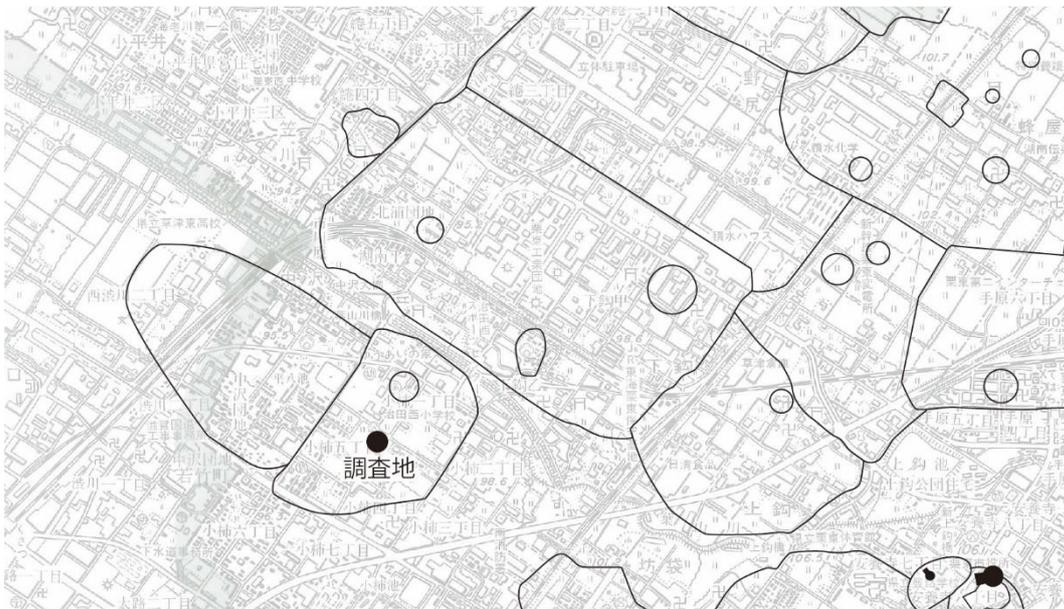
竪穴建物5埋土中出土注口土器（側面から）



竪穴建物5埋土中出土注口土器（注口部拡大写真）

7. 小柿遺跡 ～古墳と水辺の祭祀場発見～

遺跡名： 小柿（おがき）遺跡
所在地： 栗東市小柿五丁目385番の一部、386番の一部
時代： 古墳時代、飛鳥時代～奈良時代、平安時代、近世以降
調査面積： 477.40㎡
調査期間： 令和2年10月19日から令和2年12月10日（現地調査）
調査原因： 共同住宅建設
調査機関： （公財）栗東市スポーツ協会
報告者名： 近藤 広



遺跡の位置 (1/25,000)

調査の概要

遺構

古墳時代前期～中期

河川 NR13・・・検出した長さ約36m、幅約5～6.5m、深さ1.4m前後。

下層から手づくね土器を含む多数の土器が出土。

古墳 SZ1・・・大きさ一辺約7.7×3.9m以上、溝幅1.9～2.4m、深さ36cmの方墳。周溝含めた大きさは11×6m以上。

古墳 SZ2・・・大きさ一辺6×5.7m、溝幅0.4～0.8m、深さ5～11cmの方墳。周溝含めた大きさは7×6.6m。

古墳 SZ3・・・大きさ一辺6.8×6.0m、溝幅0.3～1.5m、深さ30～40cm

の方墳。周溝含めた大きさは9.5×7.8m。

古墳SZ4・・・大きさ一辺5.5以上×4.6m以上、溝幅0.7～2.7m、深さ12cmの方墳。周溝含めた大きさは6.8以上×10.0m。

古墳SZ5・・・大きさ一辺5.5以上×2.5m以上、溝幅0.7～3.0m、深さ18～30cmの方墳。周溝含めた大きさは5.7以上×5.0m以上。

古墳SZ6・・・大きさ一辺3.8以上×0.7m以上、溝幅0.7～1.0m、深さ14～20cmの方墳。

古墳SZ7・・・大きさ一辺6.0×2.4m以上、溝幅1.6～2.9m、深さ26cmの方墳。周溝含めた大きさは一辺9.5m。

古墳SZ8・・・大きさ一辺3.0m以上、溝幅0.7m以上、深さ22～26cmの方墳？の周溝と推定される。

祭祀場・・・NR13 東端周辺で手づくね土器がまとまって出土(隣接する2005年度2次調査区からは木製琴が出土している)

遺物

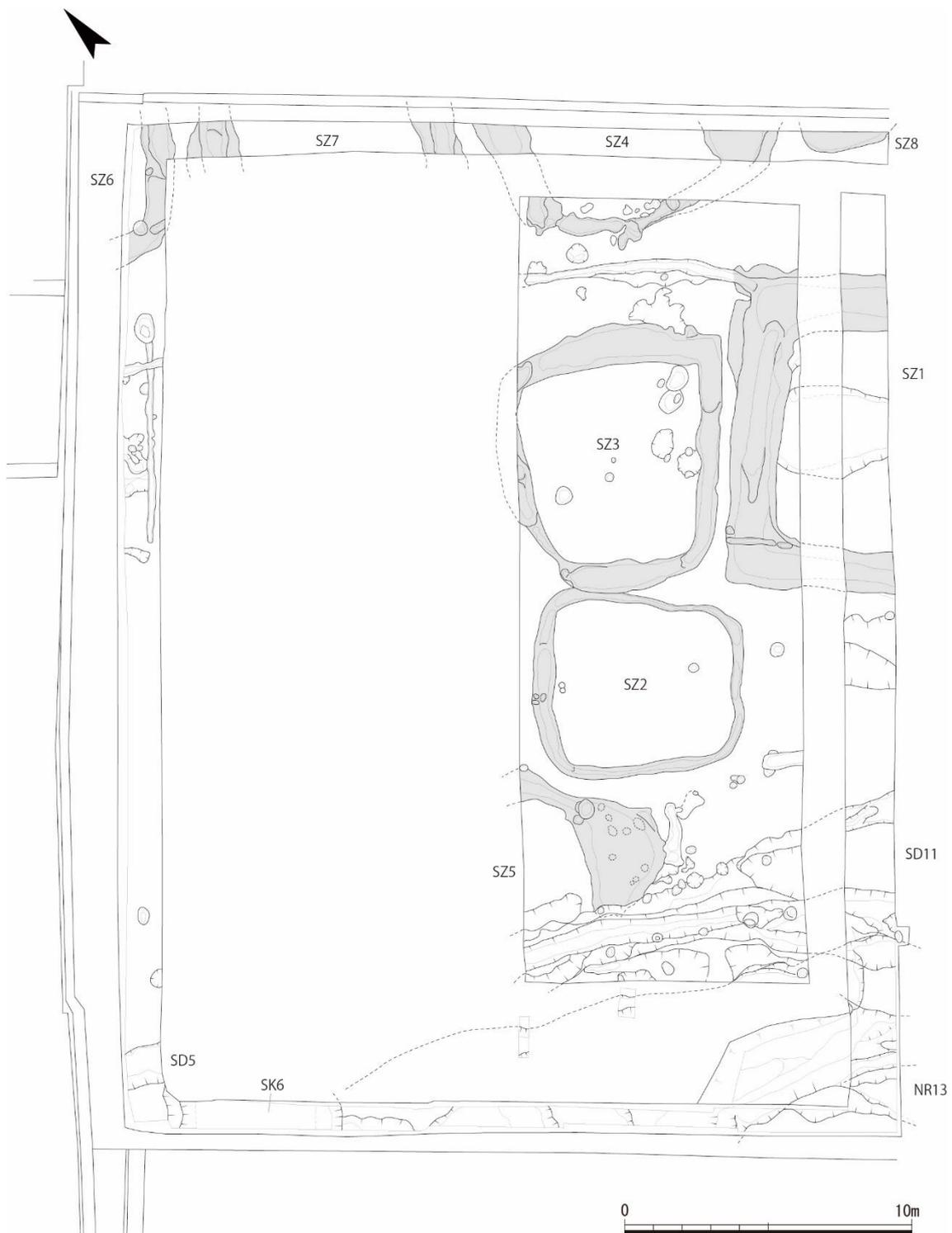
古墳時代・・・土師器、須恵器、ガラス小玉(SZ2西側周溝から出土)
手づくね土器(椀状のものが主体で平底と丸底がある)

まとめ

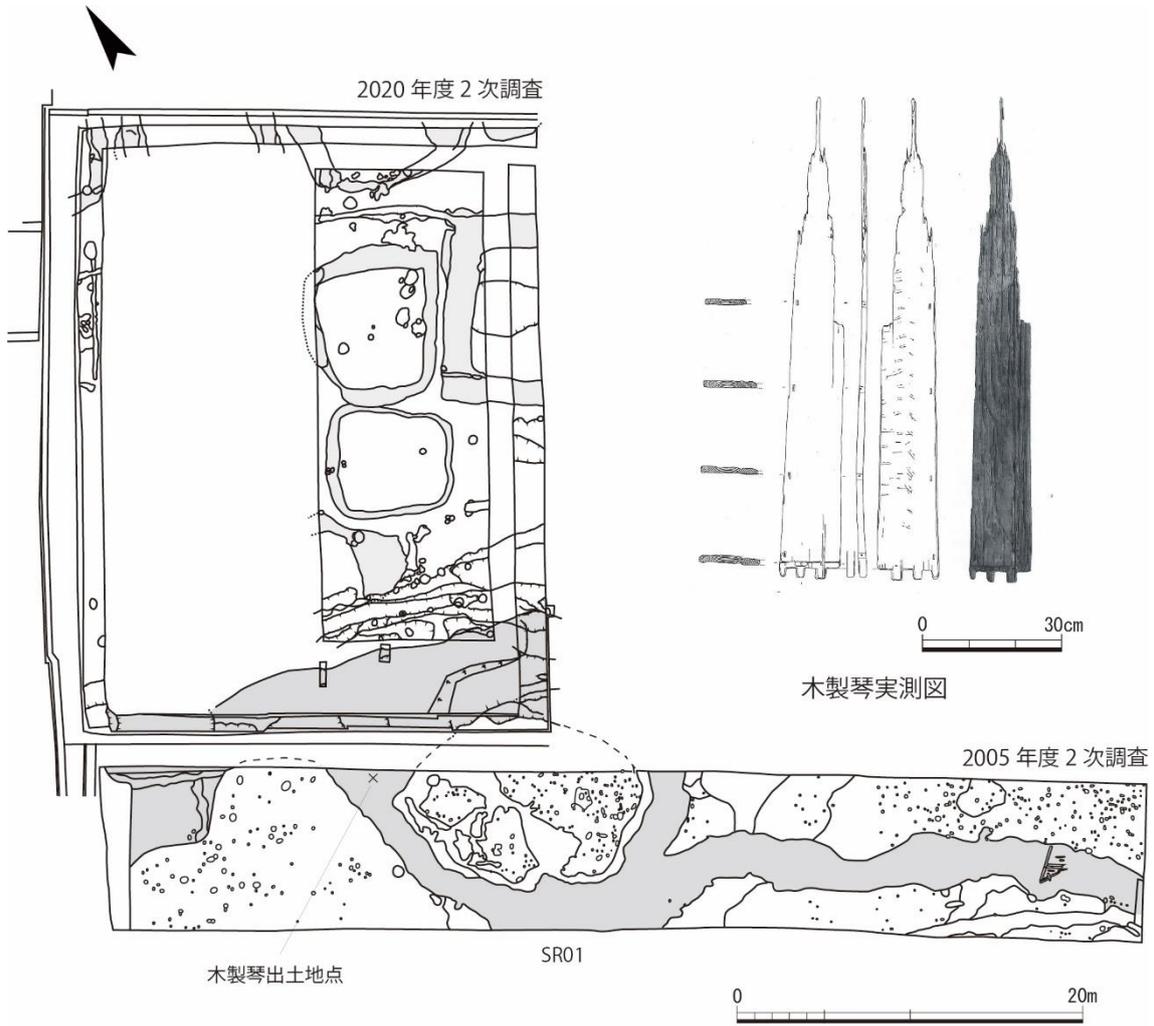
小柿遺跡は、これまでの調査で弥生中期後半から古墳時代前期を主体とする集落と、古墳が存在する遺跡として知られていた。

今回の調査では、古墳と推定される方形に溝が巡る方墳と推定される遺構が8基(SZ1～8)確認された。時期は、SZ1が5世紀、それ以外は古墳時代前期(4世紀)の可能性が高い。大きさからは、8m弱と5.5～6m級の古墳に分けられ、これらの古墳が列状に並んでいた可能性がある。過去に発見されている古墳は、最大で一辺17m、周溝3～4mの方墳で、次いで15mの方墳と続く。階層的には15m以上が集落内における中心となる人物の古墳ではないかと推定され、今回確認された8m弱と5.5～6m級の古墳はその下の階層にあたる古墳ではないかと思われる。

水辺の祭祀場については、手づくねの土器がまとまって出土しているほか、2005年度に出土した木製琴が出土したぐらいで、現段階では玉類などの遺物は一切出土していない。土器については、在地の甕である受け口状口縁甕が主体を示すことにはかわりないが、くの字口縁甕やタタキ調整を施す土器の出土が、内陸部にある高野遺跡や岩畑遺跡などより目立っていることが注目される。



調査地遺構図



調査地遺構配置図と 2005 年度調査区出土木製琴



調査地全景(西から)



SZ1、SZ2、SZ3、SZ4、SZ5、SZ8(西北から)



NR13 祭祀場土器出土状況



NR13 祭祀場手づくね土器出土状況

8. 高野遺跡 ～古代東海道を発見～

遺跡名：高野（たかの）遺跡

所在地：栗東市六地蔵地先

時代：縄文～近代

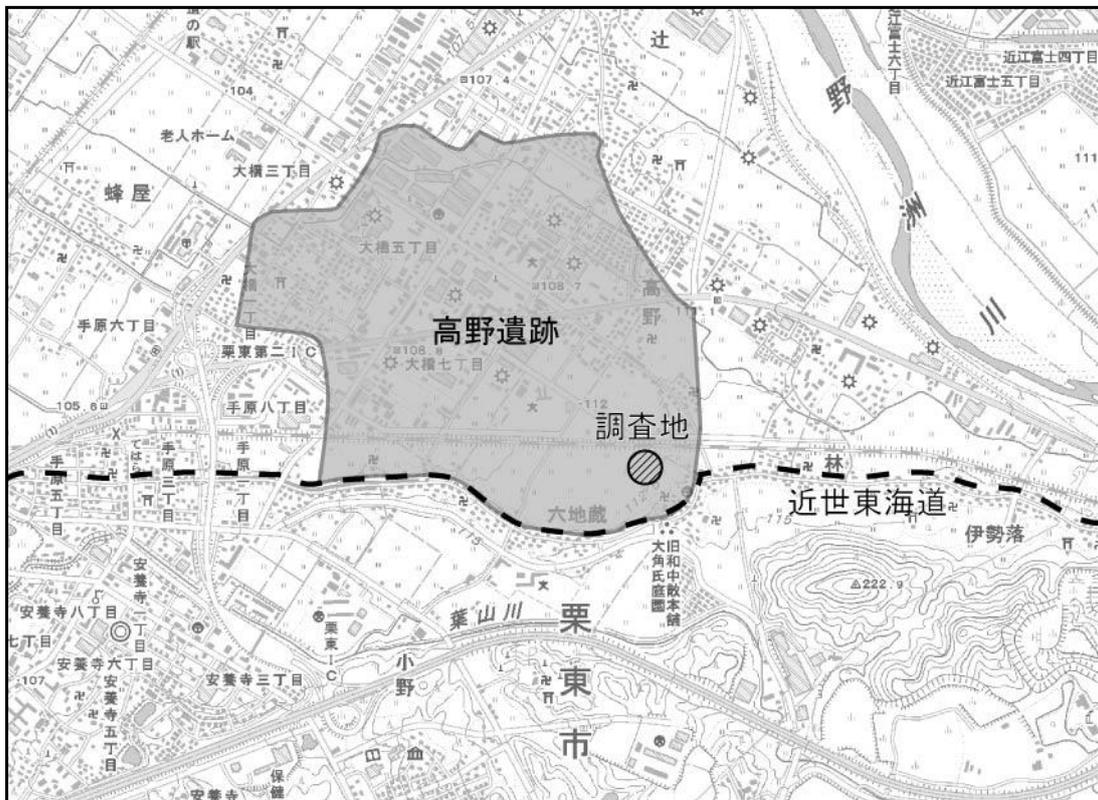
調査面積：11,989㎡

調査期間：令和2年4月～令和3年3月

調査原因：六地蔵地区ほ場整備工事

調査機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

報告者名：福井 知樹



遺跡の位置 (1/25,000)

調査の概要

当協会では、大津・南部農業農村振興事務所が実施する六地蔵地区ほ場整備工事に伴って、高野遺跡の発掘調査を平成30年度から実施しています。

今年度の調査では、古墳時代前期・同後期の竪穴建物跡をはじめ、奈良時代から平安時代にかけての推定東海道や平安時代の旧河道跡等を検出し、それらに伴い多様な遺物が出土しました。

なかでも、従来歴史地理学の研究から推定されていた範囲に、古代の東海道がみつき、ルートが特定されたことが、大きな成果となりました。

遺構

古代東海道の両側溝や古墳時代から平安時代にかけての旧河道跡、古墳時代

前期・後期の竪穴建物跡など、古墳時代から江戸時代にかけての遺構が見つかりました。おもな遺構を挙げると次のようになります。

古代東海道側溝跡 高野遺跡南端部では、歴史地理学の研究成果などから、古代東海道が横断していると推定されており、令和2年度調査対象地の一部が推定位置に該当しています。その推定位置において、東西方向に平行して延びる2条の溝跡が検出されました。溝跡の規模はいずれも幅約1m、深さ約20cm～50cm、溝と溝の中心からの距離は約16mを測ります。断続的ではありますが、約100m分の道路側溝跡を確認しました（写真1・2）。検出した側溝について、北側溝跡は西から約20m分と約50m離れた位置に約10m分見つかっています（写真3）。南側溝跡は東から約50m分見つかっています（写真4）。南側溝跡は令和元年度調査区にあった倉庫跡と考えられる総柱の掘立柱建物に近接した溝跡の延長となります。なお、令和元年度調査で発見された溝跡は今回見つかった溝跡から西に約270m離れた位置に見つかっています（遺構配置図1/2, 500を参照）。

また、2条の溝の間には同時期の遺構が分布せず、南側溝跡が令和元年度調査で見つかった倉庫の北側の溝の延長と考えられることから、道路に伴う遺構と考えられます。

旧河道跡 道の北側には旧河道跡があり、幅約4m～7m、深さ約50cm～70cmを測ります（写真5・6）。蛇行しながらも約100m分検出しました。出土遺物は古墳時代から平安時代初頭に使われていた須恵器・土師器・瓦・砥石などが出土していることから、平安時代初頭には埋没したようです。

竪穴建物跡 調査区内において竪穴建物跡を7棟検出しました。古墳時代前期のものが2棟、後期のものが5棟となっています。大半が一辺4m前後で方形のものですが、1棟のみ一辺6m前後の例があります。いずれも7世紀前半には埋没したと考えられます。

遺物

古代東海道側溝跡 側溝跡からは須恵器・土師器・瓦等が出土しています。8世紀第4四半期から9世紀初頭に用いられた土器が出土していることから、溝として機能していたのは平安時代初頭までと考えられます。そのため、道として機能していたのは平安時代初頭を中心とした時期と考えることができます。

旧河道跡 旧河道跡からは、古墳時代から平安時代の須恵器・土師器・瓦・石製品などが出土しています。約100mにわたって検出していますが、特に旧河道跡西側での遺物の出土が多く、かつ、不良品のような土器も見られることから、物資の集積場の可能性もあります。

また、旧河道跡からは銅鋳石の脈石が出土しており、近くには金属器生産を行っていたとみられる遺構も見つかっています。

まとめ

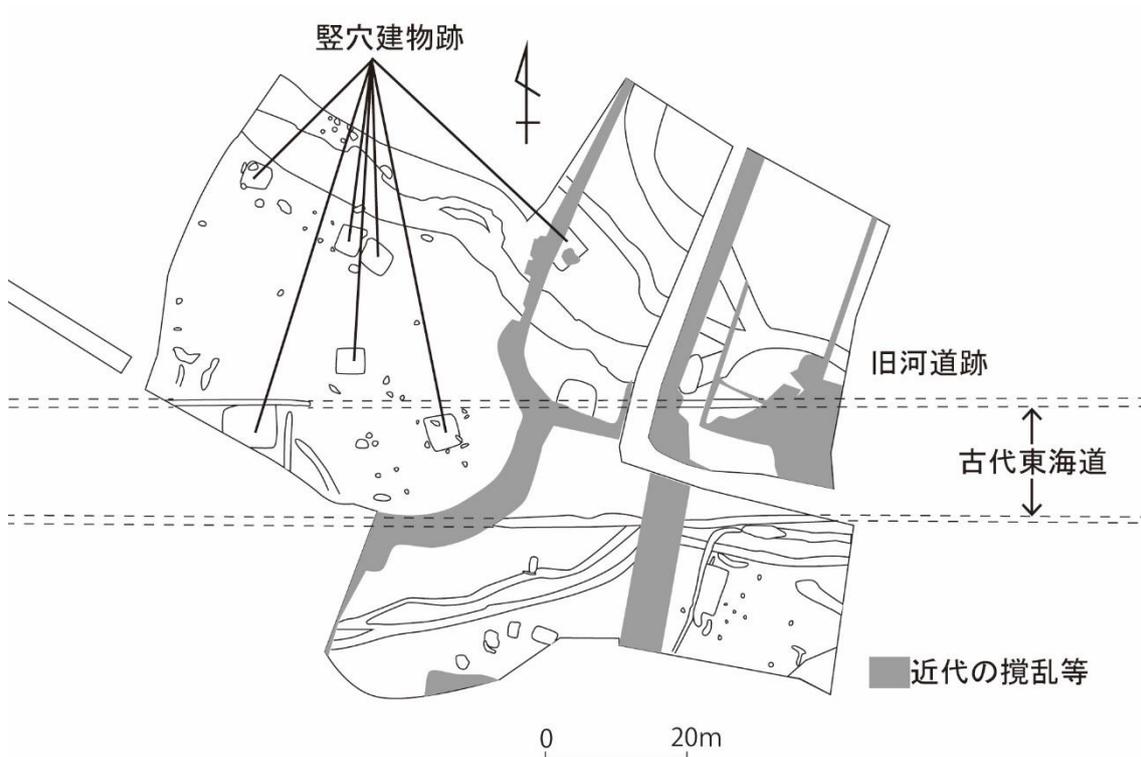
古代東海道の推定位置において、東海道の南北側溝と考えられる溝を発見し、歴史地理学での想定を発掘調査で実証することができました。今回、高野遺跡で検出された南北側溝跡から出土した遺物は、8世紀第4四半期から9世紀初頭の

ものが主体を占めており、平安時代初頭に当地が東海道として機能していたことを表しています。東海道が整備されたのは7世紀後半ですが、整備当初は大和国から伊賀国を抜け、東海地方を通り、東国まで通っていました。都が平城京から長岡京に遷った延暦3年(784年)以降に近江国を通るようになったと考えられます。その際に高野遺跡で見つかった道路を東海道として用いたと考えられます。

歴史地理学においては、従来、東山道と東海道の分岐地点が問題となっており、いくつかの説が唱えられています。これまでの発掘調査では、草津市矢倉の坊主東遺跡、矢倉口遺跡、草津市追分町の岡田追分遺跡、大將軍遺跡、栗東市上鉤の上鉤遺跡、下鉤東遺跡などで古代東海道に関係する遺構が発見されており、これらをつなぐルートが想定されています。このような発掘調査の知見から、現在では草津市矢倉の坊主東遺跡から東山道と東海道が分岐すると考えられています。

今回の調査において、手原―伊勢落間における平安時代初頭のルートを確定することができました。当地は野洲川や葉山川に挟まれた地域であり、近代まで両河川の氾濫による水害が起きていました。当地域は条里景観が色濃く残っていますが、乱れた箇所もあり、水害の影響と考えられます。古代東海道もそのような水害の影響で近世東海道の位置に移転した可能性もあり、近世東海道は高く安定した場所を求めて移転したと考えられます。

今回の調査結果では、平安時代初頭における東海道のありようを考えるうえで貴重な成果を得ることができました。



遺構配置図 (1/1,000)



遺構配置図 (1/2,500)



写真1 古代東海道（東から）



写真2 古代東海道（西から）



写真3 北側溝跡（東から）



写真4 南側溝跡（東から）



写真5 旧河道跡（西から）



写真6 旧河道跡（東から）

9. 塚本遺跡（第1次調査）～犬上川右岸扇状地の開発～

遺跡名：塚本（つかもと）遺跡

所在地：彦根市高宮町 地先

時代：古墳時代、奈良時代

調査面積：1,500㎡

調査期間：令和2年11月末～令和3年3月末

調査原因：資材置き場造成工事

調査機関：彦根市

報告者名：林 昭男



遺跡の位置 (1/25,000)

1. 調査の経緯

塚本遺跡は、犬上川右岸扇状地の扇央部、彦根市東部の多賀町との市町境付近に位置する遺跡です。これまで、本発掘調査が実施されたことはありません。今回、民間の資材置き場造成工事に伴い試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が確認されたため、記録保存を目的とした本発掘調査を実施しました。調査対象面積は約1,500㎡で、昨年11月末から調査を開始し、3月末まで実施する予定です。現在調査継続中であり、今回の報告は1月末時点での調査成果について纏めた中間報告となります。今後、調査の進展に伴い、遺構の時期や評価について、

一部変更・修正される可能性がありますことをご了承下さい。

2. 遺跡の概要

彦根市域の平野は、芹川、犬上川、宇曾川、愛知川の四河川による堆積で形成されています。その中でも、犬上川、愛知川の堆積作用はきわめて大きく、大規模な扇状地を形成しています。扇状地は、主に砂礫層で構成されているため、川の水は地下にしみこんで伏流水となり、地表の流路は涸れ水となっていることが多いです。特に、塚本遺跡が位置する扇状地扇央部は、地下水位が極めて低いため、飲料水や灌漑用水の確保が難しく、一般的に開発が困難な地域と言えます。

塚本遺跡の周囲の状況ですが、北に芹川、南に犬上川が流れており、北西約 1.5 kmには、古代幹線道路である東山道と鳥籠駅比定地の鳥籠山（大堀山）が位置します。南東約 1.5 kmには、所謂初期荘園（古代前期荘園）と呼ばれる東大寺領水沼荘（水沼村）の比定地が位置します。これは、東大寺正倉院に残されていた近江国水沼村墾田地図に描かれたもので、その比定地が現在の多賀町敏満寺周辺と考えられています。その絵図に記された天平勝宝 3（751）年の記載により、当該期には東大寺領の荘園として開発されていたと考えられています。塚本遺跡の市町境を挟んだ北東隣接地には多賀町土田遺跡がひろがっており、これまで、多賀町教育委員会などにより複数回の発掘調査が実施されており、その調査成果によると、縄文時代晩期（B. C1000）の墓跡、弥生時代後期の直線溝、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物などが確認されています。また、平安時代の 9 世紀中葉の遺構・遺物が多数検出され、その中には円面硯や石帯など官衙施設に関係する遺物も出土しています。少し離れますが芹川の右岸に位置する木曾遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物が複数棟検出されており、その内の 1 棟から鏡が出土しています。また、6 世紀後半～7 世紀前半の大壁建物が複数棟確認されており、その建物形態より渡来人との関わりが推定されています。同時期の灌漑用水路と考えられる溝も確認されています。

上記のような歴史的環境を有する塚本遺跡ですが、今回の 1 次調査では、扇状地という開発が困難な地域で、開発に取り組んだ先人たちの努力の一端が見えてきました。

3. 調査成果の概要

現在までのところ、概ね 3 時期の遺構を確認しています。以下に、時系列で主な遺構・遺物の概要について記述します。

（1）古墳時代以前の状況

① 自然流路

調査区の中央で東西を横切るように砂礫層がひろがっています。これは自然流路または河川の氾濫に伴う堆積層と考えられます。人工的な遺構ではありませんが、本当にわずかですが縄文時代の遺物（縄文土器・石器）が含まれています。

(2) 弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構

① 竪穴建物

弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物が 2 棟検出されています。その内、やや大型で調査が進んでいる竪穴建物 1 について記述します。竪穴建物 1 の平面形は、一辺約 7m の正方形で、南東側一辺の一部は凸状に外側に張り出しています。内部の状況は、竪穴壁沿いに壁溝が廻っており、支柱穴と方形の土坑も確認されています。また、中央付近の床面は堅く焼き締められており、煮炊きなどを行った炉があったと考えられます。この竪穴建物の規模・形態は、隣接地の土田遺跡における同時期の竪穴建物と同様のものがあります。

出土遺物は、古式土師器です。

(2) 飛鳥・奈良時代の遺構

① 溝（灌漑用水路）

調査区全域で、飛鳥・奈良時代の 5 条の溝（溝 1～溝 5）を検出しました。その規模は、以下のとおりです

溝 1	: 長さ約 60m 以上、幅約 1.8～2.5m、深さ約 0.8～1.3m
溝 2	: 長さ約 60m 以上、幅約 0.7～1.5m、深さ約 0.3～0.4m
溝 3	: 長さ約 30m 以上、幅約 1.2～1.7m、深さ約 0.6～0.7m
溝 4	: 長さ約 20m 以上、幅約 0.4～0.5m、深さ約 0.3～0.4m
溝 5	: 長さ約 15m 以上、幅約 0.4～0.5m、深さ約 0.1～0.2m

溝 1・2、溝 3・4 は、それぞれ大小の 2 本の溝で並行して走っているのが特徴的です。溝 1・2 は、60m 以上並行して伸びる直線溝で、溝 3・4 は緩やかに西方に分岐していく溝です。いずれの溝も、下層には砂礫が堆積していることより、多量の水が流れていたと想定され、その用途は灌漑用水路と推定しています。いずれの溝も、底部が東方から西方に下がっていくことより、同方向に水が流れていたと考えられます。

出土遺物は、縄文土器や石器、古式土師器や土師器、須恵器です。須恵器は 7 世紀後半から 8 世紀前半のものであるため、これらの溝は遅くとも 8 世紀前半には開削されたものと考えられます。

(3) 溝 1・2（奈良時代）以降の遺構

① 畦畔遺構

調査区西方で畦畔遺構 1 を確認しました。幅約 1.5m、高さ約 0.1m、東に約 33 度傾いた東西方向に伸びる畦畔です。犬上郡における条里地割が東に 31～34 度傾いた方位の地割群であるため、それに方位的に合致する畦畔と言うことができます。ただし、出土遺物がないため、溝 1・2 との切り合い関係により、溝 1・2 廃絶後以降という以外、詳細な時期は不明と言わざるを得ません。

(4) その他

① 掘立柱建物

調査区南西部で、掘立柱建物 1 を検出しました。遺構に関して未掘削のため、現在のところ詳細な時期は不明です。

4. まとめと今後の課題

今回、開発困難地域である塚本遺跡において、開発の様相の一端が見えてきました。古墳時代の竪穴建物、飛鳥・奈良時代の直線溝、詳細な時期は不明ながら犬上郡条里地割の方位に沿った畦畔遺構の検出は、当該地の開発動向と実態を検討する上で、重要な調査成果と言えるでしょう。ここでは、特に飛鳥・奈良時代の直線溝について、若干の検討を加えることでまとめに代えたいと思います。

河岸段丘面や扇状地における古代の耕地開発には、主に二つの方法がありました。

一つ目は、長距離水路による灌漑です。代表的な事例としては、大阪府の古市大溝や京都府の松室遺跡、県内においては、芹川右岸の木曾遺跡や犬上川左岸の下ノ郷遺跡などの事例を挙げることができます。松室遺跡はやや時代を遡るようですが、他の事例は、7世紀～8世紀前半頃に開削されたと考えられています。

二つ目は、溜池による灌漑です。代表的な事例としては、大阪府の狭山池、県内では八日市の布施溜や吉住池などの事例を挙げることができます。狭山池は7世紀頃、県内の2事例は8世紀頃と考えられています。

それでは、塚本遺跡が位置する犬上川右岸はどのような耕地開発が行われたのでしょうか。まず、史料となるのは前述した近江国水沼村墾田地図です。これは、現在の犬上川右岸多賀町敏満寺周辺を比定地とする東大寺領水沼荘（水沼村）を描いたものです。その記載より勝宝3年（751）年の状況が描かれているということが理解されます。そこには、溜池である水沼池（現在の大門池）と耕地を横断する長距離水路（現在の二ノ井）が描かれています。すなわち、8世紀中葉の段階には、少なくとも水沼荘（水沼村）域では、溜池（水沼池）と犬上川から直接取水する長距離水路の二つの方法のどちらも用いた耕地開発が行われていたことが確認できるのです。ただ、絵図のみでは、この耕地開発がいつ頃から行われてきたのか、溜池（水沼池）と長距離水路の前後関係の有無、また水沼荘（村）域外の犬上川右岸の耕地開発の状況など解決しなければならない課題も多く残されています。これまで犬上川右岸では、これらの課題を補う発掘調査の事例にあまり恵まれていませんでした。今回、水沼荘（水沼村）域外の塚本遺跡の調査により、検出された長距離水路が、絵図を遡る時期、少なくとも8世紀前半には開削されている状況が確認されました。また、水路の位置・敷設方向、水流の方向などより、取水元が犬上川とは考えづらく、芹川ないし埋没した旧河道であった可能性がきわめて高いと考えられます。そのように考えると、同じ犬上川右岸でも、その耕地開発の実態は多様であった状況が浮かび上がってくるのです。このように、今回の調査は、長らく停滞気味であった犬上川右岸扇状地の耕地開発の実態を検討していく上で、大きな調査成果となるでしょう。今後、残りの現地調査やその後の整理調査などを通じて、より具体的に耕地開発の実態を検討していく必要があります。また、耕地開発の実態が明らかになるにつれて、それらの大土木工事を行った開発主体の問題もでてくるでしょう。長距離水路が掘削される地域は、渡来系氏族の分布の濃い地域とも言われています。塚本

遺跡が位置する犬上川扇状地は画師として知られる箕秦氏が開発にあたったものと推定され、近隣の芹川右岸の木曾遺跡では、渡来系氏族との関わりが推定される大壁建物が検出されています。これらの渡来系氏族と耕地開発との関わりも今後検討していかなければならない課題と言えます。今後も、地道な調査・研究を進めていきたいと思えます。

最後に、上述したように塚本遺跡が位置する扇状地扇央部は、地下水位が低いため、飲料水や灌漑水の確保が難しく、一般的に開発が困難な地域と言えます。そのような、開発が困難な地域にも関わらず、現在犬上川流域の扇状地一体は広大な水田が広がっています。これらの豊かな水田が広がる美しい景観は、開発困難地域に果敢に挑み、地道に水を引き、開墾を続けた先人たちの努力の賜物であるということを経験を通じて強く感じました。

《参考文献》

- 大阪府立狭山池博物館 2011『古代狭山池と台地開発のはじまり』
佐藤泰弘 1996「4 近江 a 近江国水沼村墾田地図」『日本古代荘園絵図』
(財)滋賀県文化財保護協会 1996『いにしへの渡りびと 近江の渡来文化』
滋賀県農政水産部耕地課 2018『滋賀の農業水利変遷史』
滋賀県立安土城考古博物館 2006『扇状地の考古学』
神保忠宏・畑中英二 1997「東大寺水沼荘の開発」『紀要』第10号 財団法人滋賀県文化財保護協会
多賀町 1991『多賀町史』上巻
多賀町教育委員会・多賀町立文化財センター 2006『古代、土田に役所があった？』
彦根市 1960『彦根市史』上冊

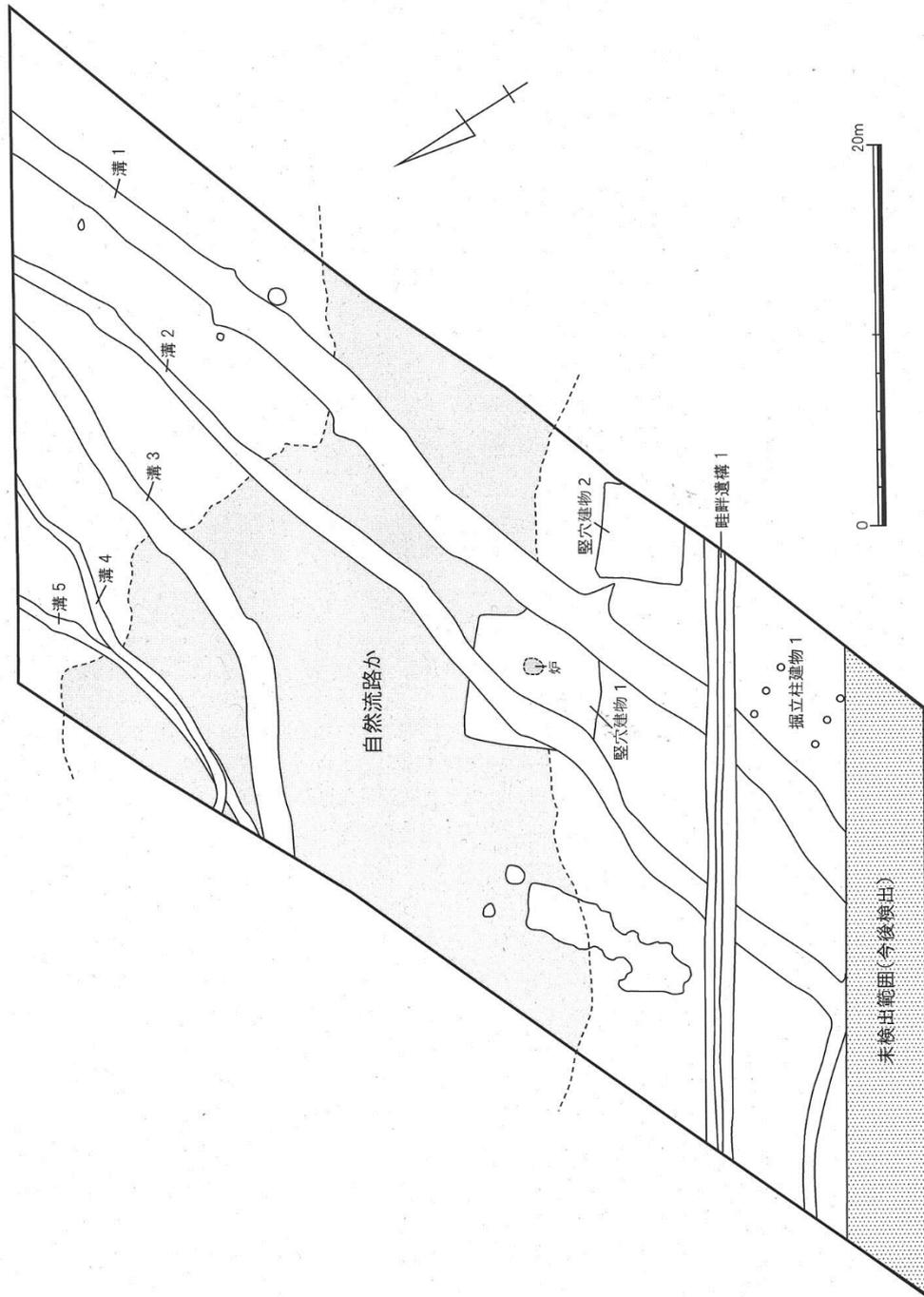


图 1 主要遺構概略図

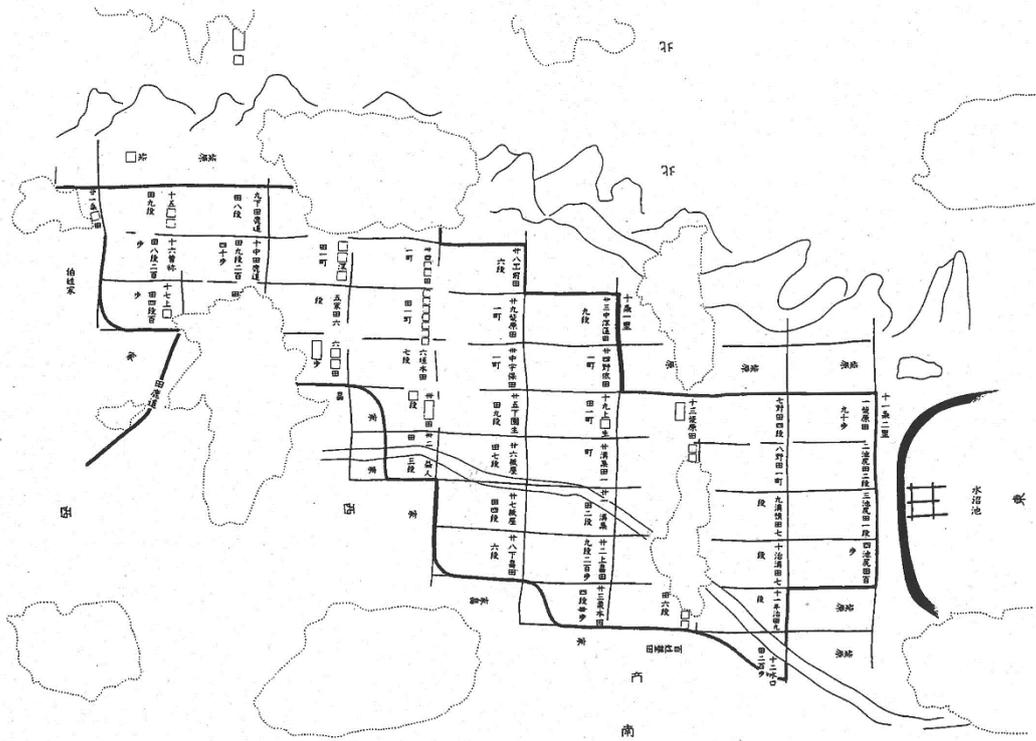


図2 水沼村墾田地図 トレース図 (佐藤 1996 より転載)

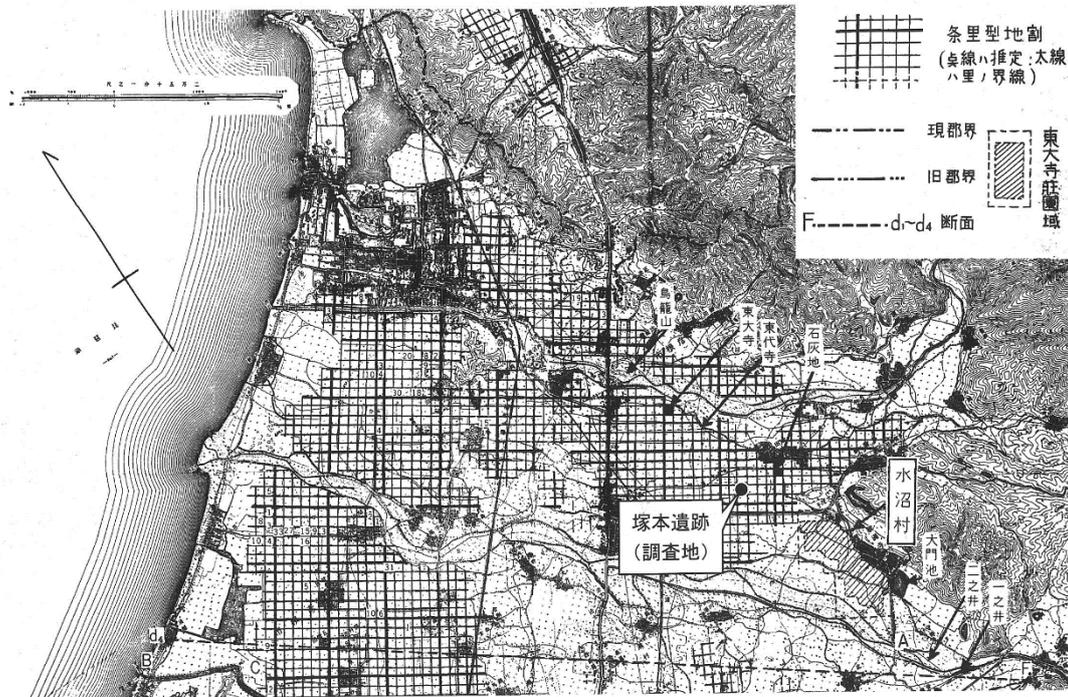


図3 犬上川扇状地の条里地割と塚本遺跡 (『彦根市史』上冊の図に加筆)



写真1 調査区遠景（北東から）



写真2 調査区全景（東から）



写真3 竪穴建物1（北東から）



写真4 溝1・2（北東から）



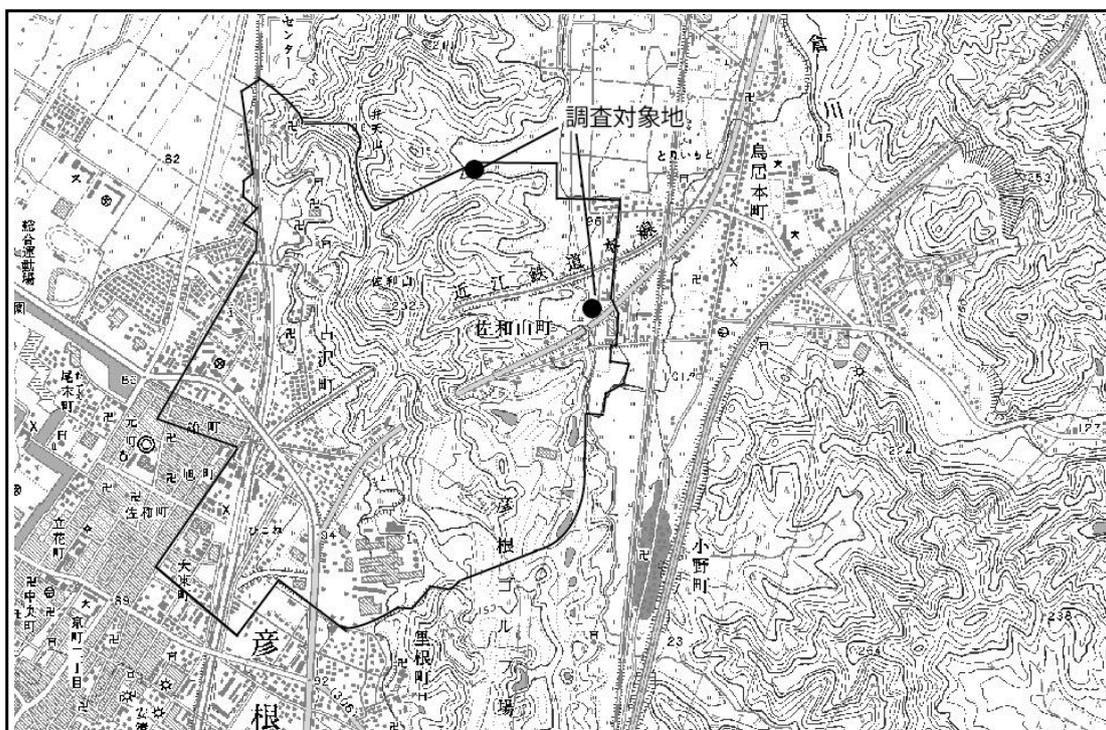
写真5 溝3・4（東から）



写真6 溝2遺物出土状況（北から）

10. 佐和山城跡 ～城下町地区・七曲り地区の調査～

遺跡名：佐和山城跡（さわやまじょうあと）
所在地：彦根市佐和山町
時代：室町時代後期～安土・桃山時代
調査面積：5,075㎡
調査期間：令和2年4月～令和2年12月
調査原因：一般国道8号米原バイパス工事
調査機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会
報告者名：山口 誠司



遺跡の位置 (1/25,000)

調査の概要

佐和山城跡は彦根市北端に位置し、南北約4kmにわたって連なる佐和山丘陵の中央部に所在します。東側には下街道(近世の朝鮮人街道)と東山道(近世の中山道)が通り、西側には松原内湖・琵琶湖をひかえた交通の水陸交通の要衝でした。約1.5km南西には特別史跡彦根城跡が位置しています。

石田三成の居城として知られますが、その歴史は古く鎌倉時代に遡るとされています。戦国時代には江北の浅井氏と江南の領域境目の城として抗争の最前線となりました。その後、城主は目まぐるしく変わっていきますが、石田三成が城主の際に城は最大規模になったと考えられています。関ヶ原の戦いで三成が

敗れると、徳川家康の家臣・井伊直政が入城しますが、慶長9年(1604)、彦根城の築城に伴って廃城となりました。

佐和山城跡では、これまでに彦根市教育委員会および(公財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として数度にわたって発掘調査が行われています。当協会では、滋賀県(教育委員会)および国土交通省近畿地方整備局滋賀国道事務所からの依頼により、一般国道8号米原バイパス建設工事に先立って平成30年度から発掘調査を実施しています。佐和山城跡は山上曲輪群・山麓曲輪群・城下町の3つの区域に大別されますが、調査対象地の大半は佐和山東麓の城下町地区に相当します。今年度は主に「七曲がり」と呼ばれる谷部(図1)および佐和山城大口付近の城下町地区(図2)で調査を行いました。「七曲り」地区では掘立柱建物、区画溝などが見つかかり、城下町地区では城下町のメインストリートである「本町筋」の痕跡を検出しました。

遺構

①「七曲り」地区(図1)

掘立柱建物・柱穴 多数の柱穴を検出していますが、明瞭に建物として復元できるものは1棟に限られます。2間×2間(4m×4m)の規模を測り、正方位を採って建てられています(写真1)。また、同じ建物を構成する柱穴でありながら、地下式礎石(礎盤)を持つものと持たないものが見受けられます。柱材が残存したのも確認されました。

区画溝 屋敷地を区画する、あるいは同じ屋敷地内を細分すると考えられる溝を合計7条検出しています。いずれも正方位を採ります。最も北で見つかった区画溝は幅約2.7mを測る比較的大規模なものでした。

②城下町地区(図2)

柱穴 城下町のメインストリート(=「本町筋」)に平行して並ぶ柱穴を検出しています。今年度の調査範囲では明瞭に掘立柱建物に復元できる柱穴群は見つかりませんでした。昨年度の調査では周辺に複数の建物があったことがわかっており、「本町筋」沿いに町家が立ち並んでいた様子を窺うことができます。柱穴の中には地下式礎石(礎盤)として五輪塔の火輪(かりん)を逆さにして転用しているものが見受けられました(写真2)。

道路遺構

盛土と硬化面 現在の市道直下約60cmのところ幅60cm～90cmの「本町筋」の痕跡と考えられる盛土および硬化面を南北約50mにわたって検出しました(写真3)。道路を敷設するにあたり、粘土を15cm～30cm盛った上から砂利を混ぜた土で締め固めて路面とおもわれる硬化面を形成しています(写真4)。道路の側面は江戸時代以降、一帯が水田化された際に大きく削平を受けていることか

ら、城下町期の道路幅は不明です。

石積み 道路は後世の削平を受け当初の姿をとどめていませんが、道路西側では南北約 25m にわたって道路に伴う石積みを検出しました。幅 15 cm～25 cm 程度、高さ 5 cm～15 cm 程度、奥行き 20 cm～30 cm 程度の石材を積み上げ道路側面を固めています。石材のほとんどは佐和山丘陵で産出するチャートです。この石積みについても後世の削平によって石材の大半が失われており、最も残りの良い部分で 2 段分が残存していました(写真 5)。石積み本来の高さは判然としないものの、硬化面の高さから考えると、本来はもう 1～2 段分の石材が積み上げられていたと考えられます。この石積みの性格についてですが、道路に直交する形で石積みの方向に向かって暗渠(あんきょ：地下に埋設された水路、写真 6)の痕跡が見られることから、石組み側溝であったと推定されます。

胴木 また、石積みの崩落を防ぐため部分的に胴木(どうぎ)と呼ばれる土台木を設置している状況も確認されました。胴木には丸太材を用いており、その外側には等間隔で杭を打ち込み胴木がずれない工夫もなされています(写真 7)。織豊期の城郭石垣にはよくみられる構造ですが、同時期の城下町において見つかることは非常に稀であり、貴重な成果といえます。

遺物

出土遺物のほとんどは室町時代後期～安土・桃山時代のものでした。「七曲り」地区では柱穴・区画溝などから土師器の皿、常滑焼の甕、信楽焼の播鉢などが出土しています。他の地区では土師器の出土量はごく少量でしたが、「七曲り」地区では比較的多く出土しています。城下町地区では「本町筋」を形成する盛土から瀬戸美濃焼の小皿類・天目碗・播鉢などが見つかっています。石積み直下からは備前焼の播鉢も出土しました。その他、五輪塔の火輪(かりん)や掘立柱建物の柱材なども見つかっています。

城下町地区で出土した遺物の年代観はおおよそ安土・桃山時代(16 世紀第 3 四半期～16 世紀第 4 四半期)に収まるのに対し、「七曲り」地区の出土遺物は室町時代後期(15 世紀後半～16 世紀前半)に位置付けられるものでした。この年代の資料は昨年までの調査ではほとんど見つかっておらず、「七曲り」地区の土地利用を考える上で重要な資料といえます。

まとめ

【今回の調査成果】

- ①「七曲り」地区で室町時代後期の遺構・遺物が見つかりました。城下町の時期よりも古く佐和山周辺の土地利用の変遷を考える上で重要な成果といえます。
- ②大手口の付近の調査で城下町の幹線道路である「本町筋」の遺構を確認しま

した。

- ③この道路遺構は粘土を盛った上から、砂利を混ぜた土で締め固めて路面を形成していることがわかりました。
- ④道路に伴う石積みを確認され、部分的に城郭石垣に見られる胴木工法が採用されていることを確認しました。石積みは石組みの側溝であったと考えられます。
- ⑤昨年度までの調査成果と合わせて考えることで、「本町筋」沿いに町屋が立ち並んでいた状況が判明しました。

今回見つかった道路遺構がどの城主の段階の城下町整備・改変と対応するのかという点が今後の検討課題となります。

【「本町筋」の敷設時期について】

硬化面を形成する土層や石積み下部からは 16 世紀後葉の瀬戸美濃焼の小皿片・播鉢片、備前焼の播鉢片が出土しているため、その時期以降に敷設されたことが判明しています。

これが、誰が佐和山城主であった時期のものかについてですが、16 世紀後葉の城主を見ていくと、表 1 のとおり、めまぐるしく変遷しており、誰が城主の時代に道路が敷設されたのか、結論を得るにはさらなる検討が必要と言えます。

ただし、①「本町筋」は城下町の基幹となる道路であるため、城下町建設の初期段階あるいは城下町建設に先だって設けられたと考えられること、②昨年までの調査で堀尾吉晴が城主の時期には、城下町が成立していたと考えられることから、遅くとも堀尾吉晴が城主の時期には敷設されていたと言えます。また、胴木工法は織田信長やその家臣の城で見られる工法であることから、早く見れば織田信長の勢力下にあった段階、すなわち丹羽長秀が城主の時期に敷設された可能性も残ります。

表 1 佐和山城主の変遷

城主	期間	備考
磯野員正	?～元亀2年(1571)	浅井氏家臣、織田信長に降伏
丹羽長秀	元亀2年(1571)～天正10年(1582)	信長上洛時の宿所としても機能
堀秀政	天正10年(1582)～天正13年(1585)	清洲会議の結果、城主に
堀尾吉晴	天正13年(1585)～天正19年(1591)	豊臣秀次の宿老
(豊臣家蔵入地)	天正19年(1591)～文禄4年(1595)	秀次移封に伴い秀吉直轄地に
石田三成	文禄4年(1595)～慶長5年(1600)	城・城下町の大規模改修
石川康通など	慶長5年(1600)～慶長6年(1601)	落城後の城番
井伊直政	慶長6年(1601)～慶長7年(1602)	石田三成の旧領を拝領
井伊直継	慶長7年(1602)～慶長9年(1604)	直政の死去に伴い城主に



写真 1 掘立柱建物跡の検出状況（北から）



写真2 五輪塔の火輪を転用した地下式礎石(礎盤) (南から)



写真3 現在の道路下から見つかった「本町筋」 (南から)



写真4 「本町筋」盛土の土層断面（北から）



写真5 「本町筋」に伴う石積みの詳細（西から）



写真6 「本町筋」の盛土下部から見つかった木樋（北東から）



写真7 「本町筋」とそれに伴う石積み・胴木（北から）

1 1. 名勝 旧秀隣寺庭園 ～新たな石積み遺構を確認～

遺跡名：名勝 旧秀隣寺（きゅうしゅうりんじ）庭園

所在地：高島市朽木岩瀬374番地（興聖寺境内）

時代：室町時代後期

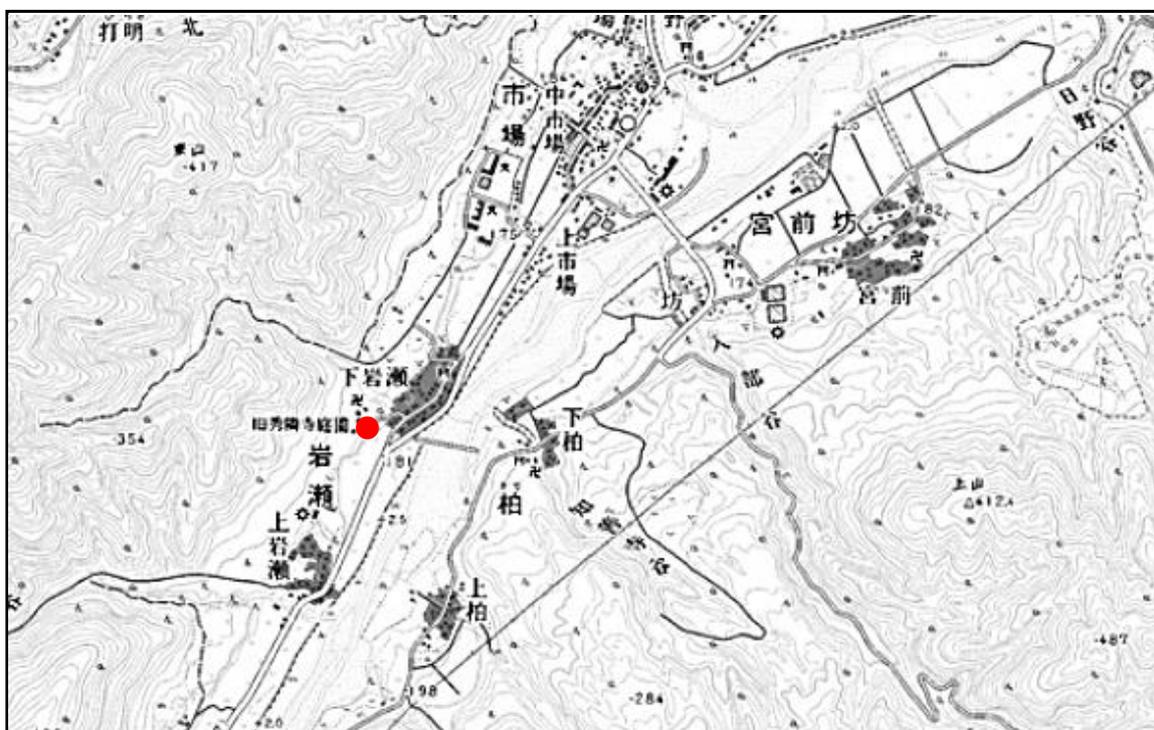
調査面積：22㎡

調査期間：令和2年10月～令和3年3月

調査原因：庭園修復に伴う調査

調査機関：高島市教育委員会 文化財課

報告者名：宮崎 雅充



遺跡の位置（1/25,000）

調査の概要

旧秀隣寺庭園は、享禄元（1528）年に室町幕府12代将軍足利義晴が京都の兵乱を避けて、朽木植綱の居館である岩神館に滞在している時に造られた庭園です。13代将軍足利義輝も計8年間にわたって当館に滞在するなど、室町時代の代表的な庭園として、昭和10（1935）年に「旧秀隣寺庭園」として国の名勝に指定されました。庭園の名称は、慶長11（1606）年に朽木宣綱により岩神館の跡地に秀隣寺が建立されたことによります。

庭園は、造られてから500年近い年数が経過し、石組の傾斜や導水の流れ、庭木の老化などの損傷が著しいことから、令和3年度からの庭園修復に先立ち、発掘調査を実施しました。

調査の結果、庭園の池尻（池の排水口）石組付近の下層から新たな石積みを検

出しました。検出した石積みは、朽木氏の岩神館に伴う石積みの可能性や、後年の庭園改修を示す可能性が考えられます。

遺構

旧秀隣寺庭園は、安曇川により形成された河岸段丘上に造られ、眼下に京と若狭を繋ぐ若狭街道（通称：鯖街道）を望みます。

庭園には、滝石組と枯滝、中島、石橋、鯉魚石など多くの石組による意匠が用いられ、管領（将軍に次ぐ役職）の細川高国が作庭したとも伝わります。現在は、興聖寺境内地の南西に位置し、その周囲には土塁や空堀など、将軍の館としての防御施設の痕跡が残っています。

発掘調査は、庭園が造られた地盤やその形成の過程、池護岸の石組や池底の構造確認などを目的に実施しました。その成果のひとつに、池尻の石組付近の下層から新たな石積み遺構が検出したことが上げられます。

検出した石積み遺構は、池尻の石組の下層から 20～30 cm 程の川原石によって構築された 3 段程残る石積みです。ほぼ垂直に積み上げられた石積みは、高さ約 40 cm を測ります。石積みは、池護岸から西に 1m ほど延びた後、ほぼ直角に南に屈曲する形で検出しました。池側に石積みの面を揃えることから、石積みは池側に表出していたものと考えられます。庭園に使われている池護岸は 1m ほどの大きさの山石（チャート）であるのに対し、下層の石積みは川原石を用いるなど、意匠が大きく異なります。このことから、下層の石積みは、庭園の意匠的な側面より、排水や護岸を目的とした機能面を重視していたと考えられます。

今回新たに検出した石積みは、旧秀隣寺庭園の池護岸の下層に位置することから、現在 3 つの性格の可能性が考えられます。

①朽木氏の居館である岩神館に伴う石積みの可能性

旧秀隣寺庭園に先立ち存在した朽木氏の岩神館に伴う石積みで、現在につながる庭園の石組は、岩神館に伴う石積みを埋めて構築したものの。

②当初の旧秀隣寺庭園の池護岸を構成した石積みの可能性

旧秀隣寺庭園の排水などの機能面を重視して構築された当初の石積みで、後年に池護岸の拡張や改修に伴い埋められ、現在につながる庭園の石組が設置されたもの。

③旧秀隣寺庭園や朽木氏岩神館に伴わない別の石積みの可能性

17 世紀初頭に同境内に建立された秀隣寺に伴う石積みで、18 世紀前半の興聖寺移転に伴い埋められ、現在につながる庭園の石組が構築されたもの。

遺物

下層の石積みを埋めた土から、17～18 世紀にかけての磁器類の破片が 2 点出土しています。この土器がどの段階に伴うものかは、更なる調査と検証が必要です。今後の調査による解明が課題となっています。

遺構図等

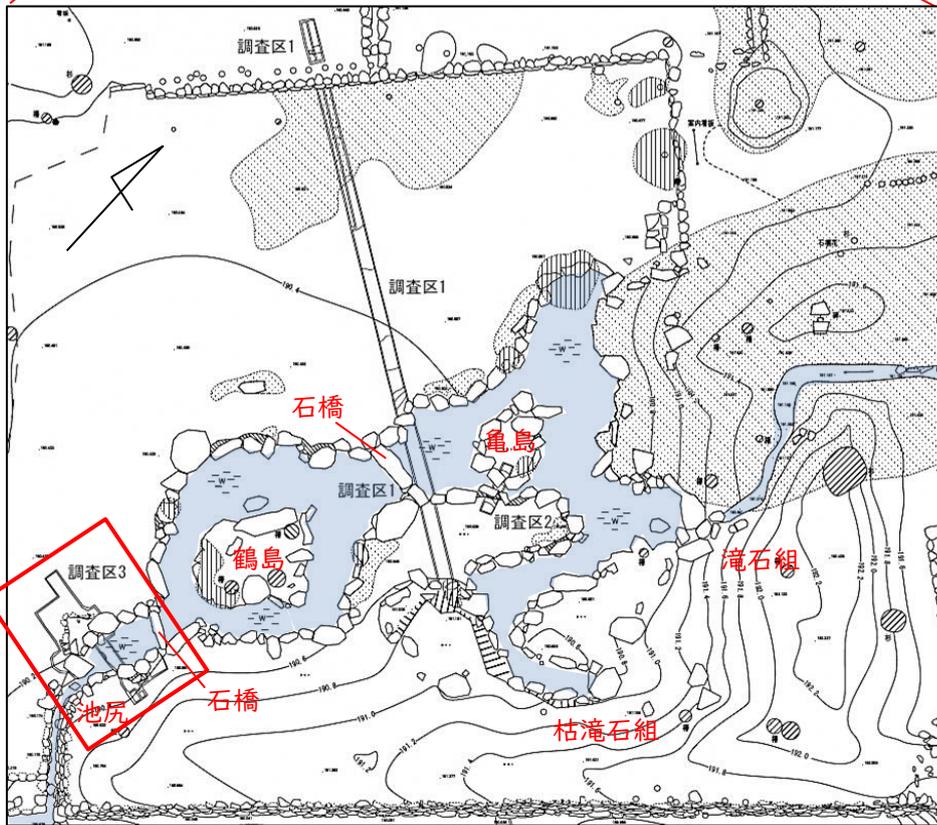
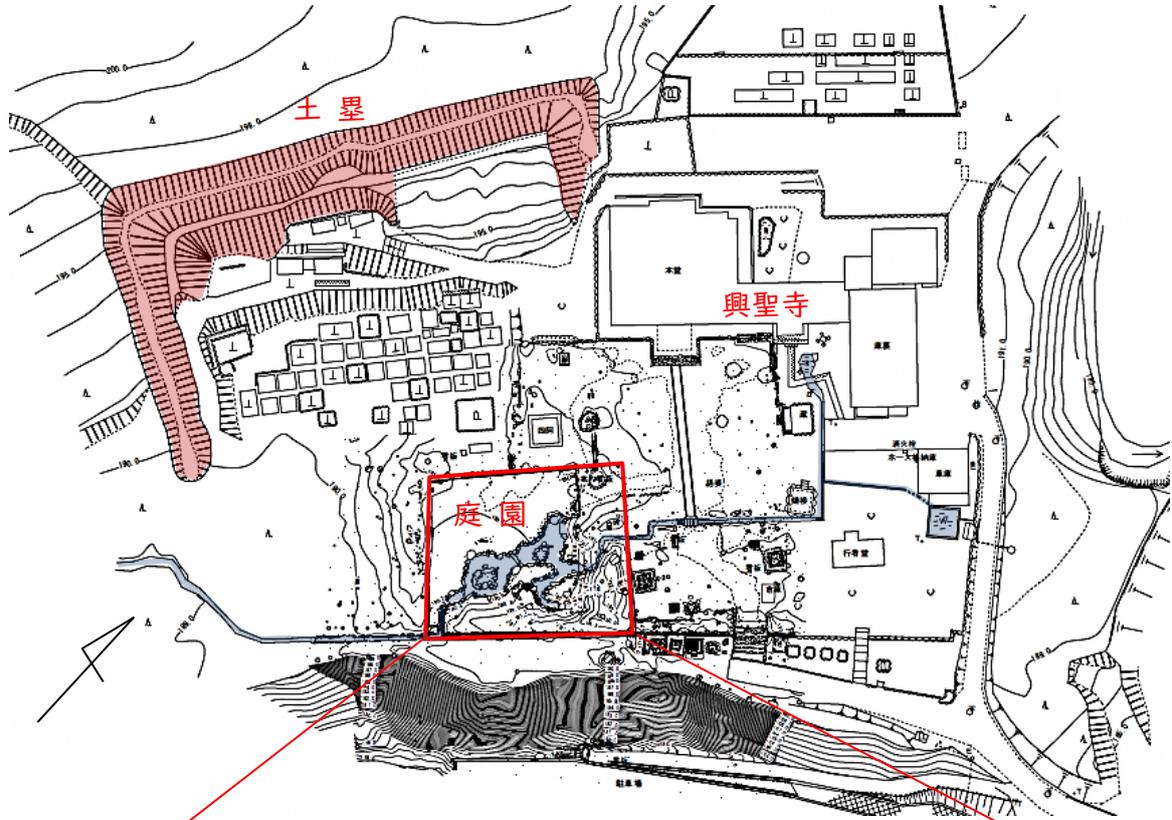


図2へ

図1 上：興聖寺境内図・下：庭園測量図

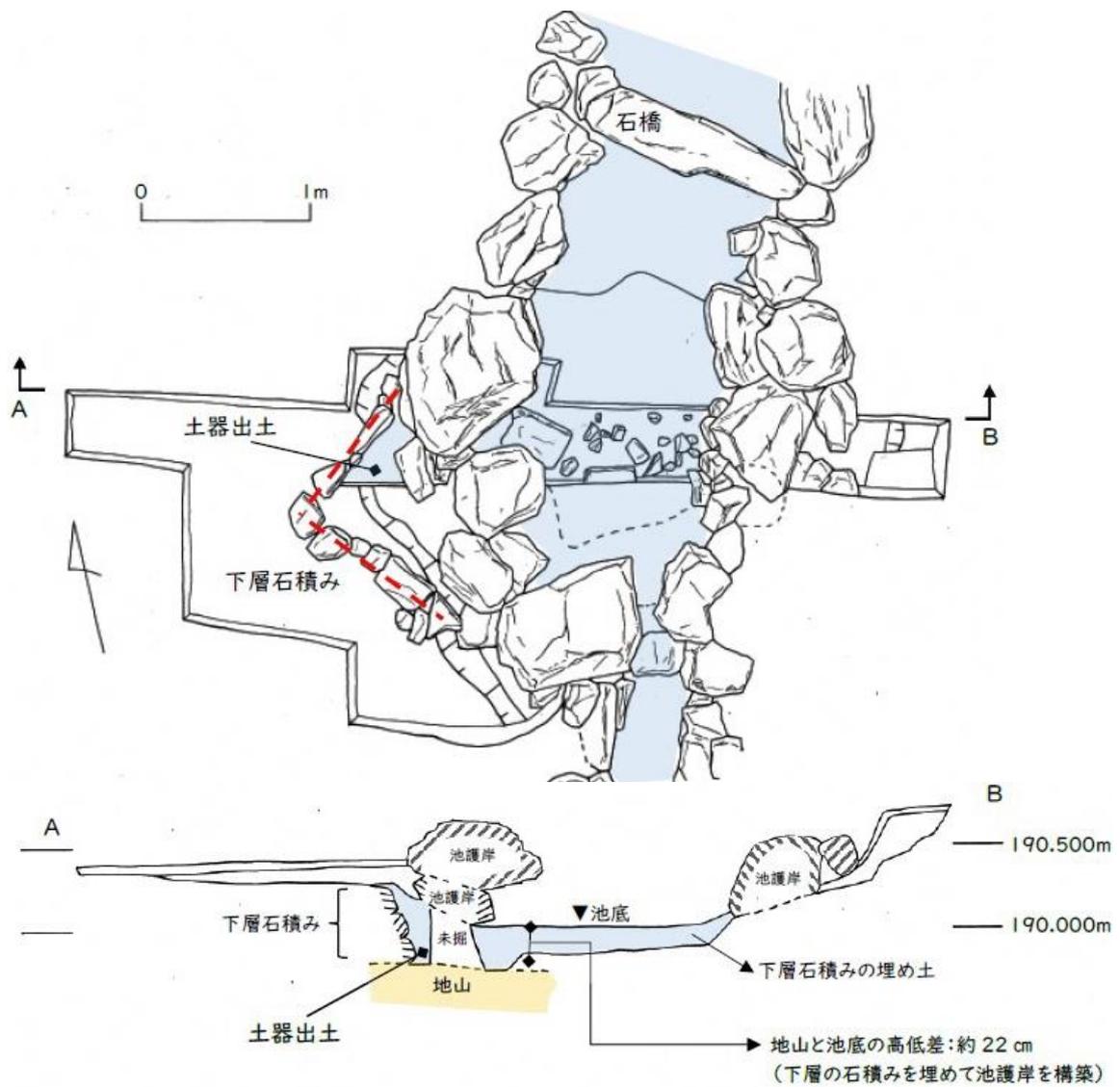


図2 上：池尻遺構図・下：下層石積み検出状況



図3 庭園全景



図4 左：調査の様子・右：「足利将軍義晴公之庭園」の石柱

令和2年度滋賀県埋蔵文化財発掘調査成果報告集
土の中から歴史が見える 2020
—最新の発掘成果から—
(第115回滋賀県埋蔵文化財センター研究会)

令和3年(2021年)3月1日発行

編集：滋賀県埋蔵文化財センター
大津市瀬田南大萱町1732-2
[TEL:077-548-9681](tel:077-548-9681)

※当資料集に掲載した写真等の無断転載は禁止します。
各調査機関にお問い合わせください。